

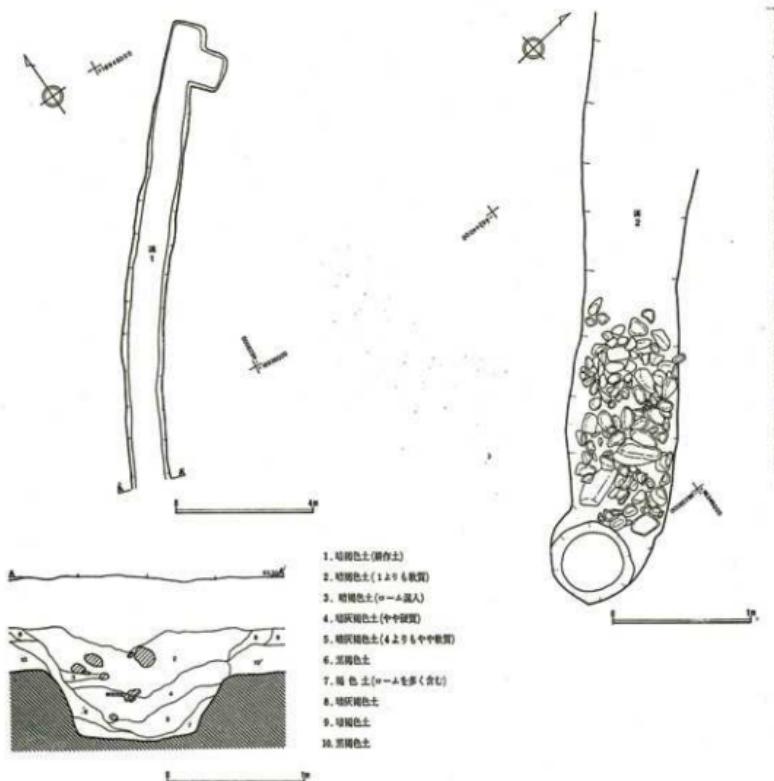
第125図 三ヶ尻林遺跡A区6号土
埴A・B出土鉄釘

3. 溝と出土遺物

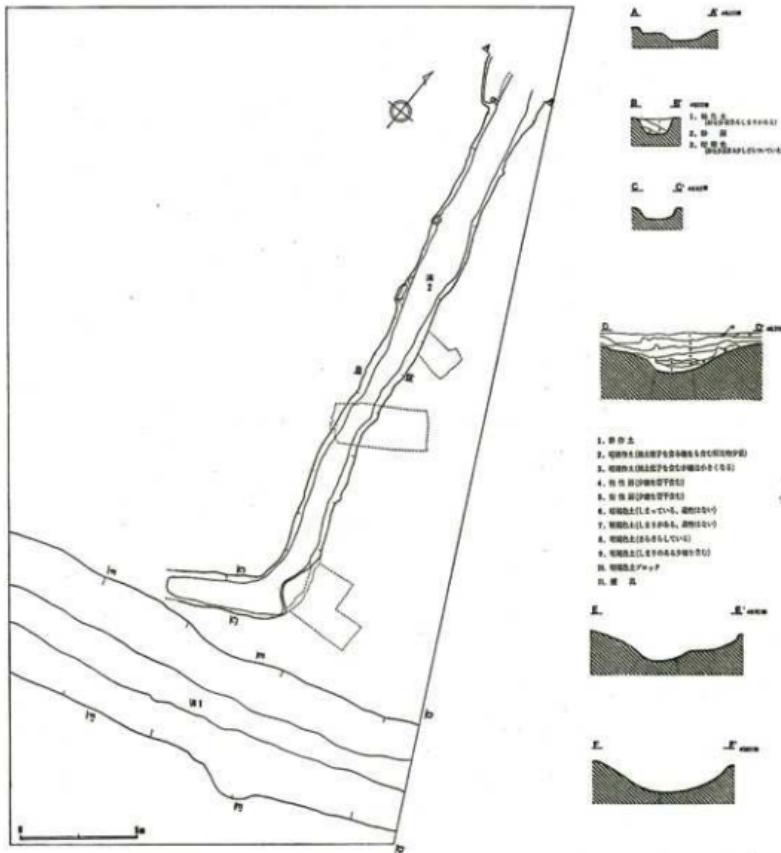
三ヶ尻遺跡C区1号溝（第126図）

溝は調査区の西側を東西に走り、縄文前期（黒浜）の住居跡2軒を切っている。幅は45~55cm、東端は約90cmを測る。溝底は「コ」の字形を呈し、平坦で一定している。西側は僅かに高く、東側の屈曲部との比高差は10cm程度である。溝の覆土は擾乱を受けている箇所が多く、擾乱を受けていない西側は疊、ロームブロックを含む軟質の暗褐色土である。

出土遺物は焰烙、茶碗（磁器）などの破片である。遺物は近世の所産と思われるが、多くは擾乱土層中から出土して、構築時期、性格を推定するには慎重を要する遺構である。



第126図 三ヶ尻林遺跡C区1・2号溝全体図および断面図

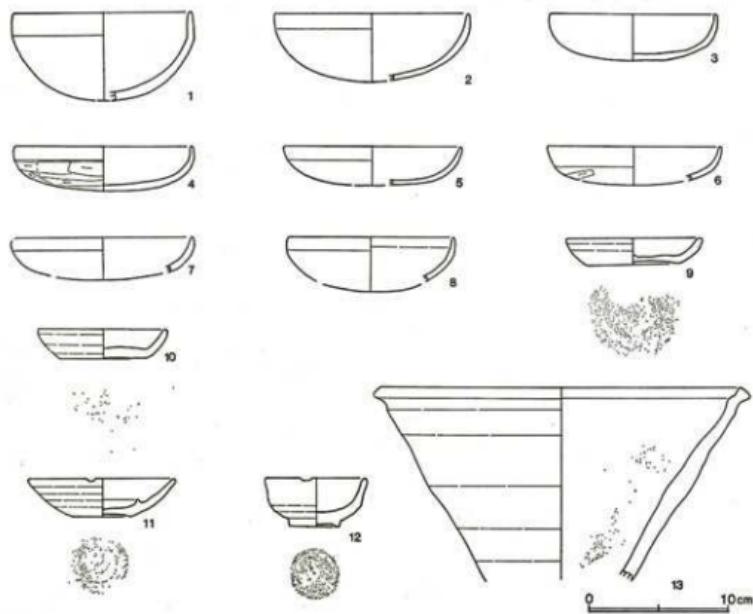


第127図 三ヶ尻林遺跡D区1・2号溝全体図および断面図

三ヶ尻林遺跡C区2号溝（第126図）

調査区の東側をほぼ南北に走る。幅70~85cm、深さ（南端）約50cmを測り、断面はやや崩れた「U」字形を呈する溝である。南端付近は長さ1.6m、幅80cmに亘って大小の砾が敷かれており、人為的な敷石と思われる。溝の覆土はやや軟質の暗褐色~黒褐色で、僅かにロームブロックを含む。

出土遺物は覆土中より繩文前期（黒浜）の土器片が出土している他、近世の陶器の破片が数点出土している。溝の構築時期は不明であるが、敷石された箇所は整然と造られており、覆土の状態などから敷石のない箇所もかつては敷石され、北側に伸びていたものと推測される。



第128図 三ヶ尻林遺跡D区溝出土遺物

三ヶ尻林遺跡D区1号溝（第127図）

検出された溝は台地の斜面下をやや湾曲しながら東西に走る。調査区における溝の長さは約18m、幅約4.5m～6m、深さ約1.2mで西側が高く、東側が低くなっている。また、土層を観察すると上層は擾乱などによる暗褐色土が多く混入するが、中層以下は粘性の強い土や砂質土が堆積しており、以前は水が流れているものと思われる。出土遺物は古墳時代後期～平安時代初頭の土師器、近世の燈明皿、擂鉢などの破片が出土している。

三ヶ尻林遺跡D区2号溝（第127図）

溝は台地の斜面下を南北に走り、1号溝の付近で大きく西へ湾曲する。先端部は擾乱を受けている。調査区における溝の長さは約30m、幅は約2～3m、深さ30～60cmを測る。北側が高く、南側が低い。土層は暗褐色～黒褐色を呈し、やや軟質である。第3層下は硬層となる。溝は3箇所に亘って近世と思われる墓壙などによって擾乱を受けている。出土遺物は土師器、カワラケなどの小破片が覆土上層から出土している。

三ヶ尻林遺跡D区1号溝出土遺物（第128図）

1は口縁部が直線的に内傾し、端部は丸い。体部から底部は丸味をもつ。内面は横ナデ、外面は磨滅。灰茶褐色。砂粒、黑色鉱物粒含む。焼成良好。 $\frac{3}{10}$ 存。覆土。

2～4は口縁部が内湾し、外傾する。端部は丸い。2の底部はやや深い。4の体部外面は横位の

ヘラケズリ。2、3は磨滅。内面から口縁部外面はいずれも横ナデ。2は明茶褐色、3は橙褐色、4は淡茶褐色。砂粒、黒色鉱物粒、雲母など含む。2は $\frac{1}{2}$ 存、3は $\frac{1}{2}$ 存、4は $\frac{7}{10}$ 存、焼成良好。覆土。

5～8は口縁部が内湾ぎみに外傾する。端部は丸く、8を除いて浅い底部である。6の体部外面には僅かに斜位のヘラケズリが残るが他は磨滅。内面はいずれも横ナデ。5、7、8は淡赤褐色、6は明茶褐色。5は $\frac{3}{10}$ 存、6～8は $\frac{1}{2}$ 存。砂粒、黒色鉱物粒、白色鉱物粒など含む。焼成良好。覆土中層。9は口縁部が内湾ぎみに肥厚し外傾、端部やや平坦。底部は器肉が薄く、上底気味。底部回転糸切り。暗赤褐色～淡赤褐色。 $\frac{7}{10}$ 存。砂粒、黒色鉱物粒、金雲母など含む。形態歪む。焼成普通。覆土。

11は口縁部が内湾ぎみに外傾。端部は丸く、底部上底気味。内面から体部外面にかけては淡鉄釉がかかる。内面に4ヶ所にトチンを残し、燈明皿として使用されたものと思われ、口縁端部を部分的に欠く。底部は橙褐色。底部回転糸切り。砂粒、白色鉱物粒含む。完存。焼成、良好。覆土。12はぐい編呑風の形態を示す。口縁端部は肥厚し、丸い。底部は削出し高台で若干剥落している。内面から体部外面にかけては黄褐色の灰釉がかかる。11と同様、口縁部端部を一部欠いており、燈明皿としても使用されたものと思われる。底部は灰白色。砂粒含む。 $\frac{9}{10}$ 存。焼成良好。覆土上層。13は口縁部が大きく外傾し、端部をやや外側に屈曲させた擂鉢である。口縁端部磨滅。内外面に鬼板釉がかかる。内面には11条の刷毛目。砂粒、白色鉱物粒、石英など含む。胴部は横ナデが部分的に施される。形態やや歪む。焼成良好。覆土上層。

三ヶ尻林遺跡D区2号溝出土遺物（第128図）

10口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。底部はやや上底気味で厚い器内。底部回転糸切り離し。内面は灰褐色、外面は赤褐色。口縁端部黒褐色（一部）。砂粒含む。形態やや歪む。 $\frac{9}{10}$ 存。焼成良好。覆土。

4. その他の遺構と出土遺物

三ヶ尻林遺跡1号竪穴遺構（第42図）

A区1号墳付近に発見された軟質黒色土の落ち込み。幅4.5、奥行3m。底面はほぼ平坦だが住居跡のものとは異なる。柱大の礫が底面より浮いて雜につめられ、それに混入して土師器坏、甕、須恵器提瓶が出土した。その状況やA区2号墳付近で同一の方形集石遺構が発見され、同じような遺物が出土したので、同様の後世の廃棄物集積（山林開拓時？）遺構で遺物はその時散乱したと推定される。

倒木痕跡

いわゆる倒木痕跡が特にA区西側に23ヶ所集中していた。不整円形プランで大小あり、中央に砂利やロームと黒色土とが平面に並んで露出する。古墳周囲以前や土壤が切るものなど時間差がある。

その他

D区は一部を除きトレンチ発掘のみで溝2本が検出されている。台地斜面のG・H・Iトレンチでは遺構は検出されなかったが覆土より縄文前期土器、埴輪片、近世陶磁器片が出土した。J～Mトレンチではカワラケ小片、Cトレンチでは埴輪片、Aトレンチから焼土が検出されたが明確な遺構はなかった。E、Fトレンチは安定した自然堤防地形であったがカラワケ小片が出土した。

VIII 結 語

古墳について

古墳は16基検出されたが部分調査のため全体形状が確定できない部分もある。またほとんどが古墳跡である。ここでは遺構を中心にいくつかの特徴を示す。

古墳分布はA群（1～3号）、B群（4～10・15号）、C群（11～13・16号）に分けられる。狭長な調査区で便利になるが、それでも相互に接近した古墳で特徴的な群別が可能である。A、C群は整った円（弧）形周堀をもち、B群は不規則不定形周堀の一一群である。まずC群はすべて埴輪を伴い、円形周堀を強く志向するもので、位置関係から13号→12号が考えられ、また16号は調査例中最も古いタイプの埴輪を伴うので、16号→13号→12号→（11号）という方向性（直線的）をもって台地奥へ向かって作られたと考えられる。それに対してB群は周堀形状に関してはかなりルーズである。位置関係から4号→5号が考えられるが他は不明である。4・6・7号に埴輪をもつ。B群の特徴は周堀範囲の大きい古墳が含まれる。しかし4号墳で確認されたように周堀規模と墳丘の大ささは必ずしも一致せず、外形（周堀）より墳丘に重きをおく一群でありC群とは対称的である。C群とは時期的に重なり合うものも考えられるが、埴輪を欠くものが多く、より新しい一群と考えられる。大まかに定形→不定形の傾向があることは三ヶ尻天王遺跡と同じである。次にA群は埴輪をもつ3号が最も古く、埴輪のない1・2号が次に作られる。ここでは1号がC群の12・13・16号と同じように円形周堀をもち、また2号もC群の11号と類似した周堀形態をとる、埴輪を伴なわない新しいものであるが不定形周堀では無い。三ヶ尻天王遺跡でも埴輪を伴なわない定形化した周堀をもつ例があり、これらが小規模であることから、大きな不規則・不定形周堀をもつものがずっと作られるとは限らない例である。ただし大形不定形周堀をもつ4号でも葺石帶で確定された墳丘規模が、定形周堀の内径にはば等しいことは注意すべきである。なお周堀の一部を特に深掘りする例があり、大きな円形土壙になっている例もある（1・3・5・7・8・12・13・16号）。これらについてはかつて深掘り部はその土層特色から墳丘盛土にはならず、石室後ごめの粘土探査部分ではないかと指摘したことがあるが（註1）、当遺跡でも全く同様で、砂利層をわざわざ掘っているので石室後ごめ用砂利探査跡と考えられる。

墳丘については4号墳の保存が良かった。上下2段の葺石帶、中段に埴輪樹立という形態、構造の特色は県内では神川村城戸野・十二ヶ谷戸古墳群（註2）、美里村広木大町古墳群（註3）、上里町帯刀古墳群（註4）、群馬県では富岡5号墳（註5）などがある。広木大町、帯刀例が4古墳に近い時期で他は一段階古いものであるが、4号墳は前庭部形態構造において定形化し、埴輪樹立では形式化したものである。古いものは下部葺石帶相当部が全周してしまい、石室に入りにくいう状況になっている。富岡例などはこれについて外側に降る階段を想定している程である。埴輪については富岡例が本来の姿と思われ、中段の外縁に多量の埴輪（円筒主体）を一周させ、その内側の石室に近い中段部に形象埴輪を並べるものである。4号墳では一列で、その間隔も粗い。もともとは内部に出入しない構造の古墳の型が本来であったと思われる。その他細部構造について4号墳と

異なるものはかなりある。更にこの墳丘構造は同時期のすべての古墳に採用されるわけではないので、墳丘外観にまで被葬者の差異が表わるとさるべきであろう。

石室は1・4・5・14号で確認されたが、全体が知れるのは1・4号のみである。いずれも河原石使用の胴張り石室で形態特徴から4・5・7号、1・14号に分類される。4号墳は胴張りが非常に少なく、玄室床が義道床より低く、玄門柱石(石室内に突出する形態のもの)を欠き、使用蹠はやや大形である。石室後ごめは砂利と主体とし、後ごめ基底部および外側に蹠を並べ堅固なつくりである。5・7号墳石室もその残存状況から同様の特色が知られる。それに対して1号墳石室は胴張りが強く、奥壁プランがやや湾曲し、抜き取られているが、奥壁中央に細長く、いわゆる鏡石を積み上げるか、立てるかするものである。玄門柱石については板状の石が立てられていたことが根石によって知られる、後ごめは壁の背後に直接土でかためたもので、使用蹠はやや小形で扁平気味である。14号墳も同様例と思われる。なお三ヶ尻天王遺跡の2・3号墳もこの部類である。以上の各々の特徴は河原石使用胴張り石室の時期差を示す。1号墳石室の特徴は美里村塚本山古墳(註6)や川本町鹿島古墳群(註7)中に類例が多い。奥壁プランとその構造特徴は鹿島古墳群との類似点が多く、また後ごめ状況と玄門柱石設置は塚本山古墳群では7世紀半ば以降の新しい一群に多い。鹿島古墳群も7世紀後半~8世紀と考えられているので、1号墳石室は7世紀後半としてよいであろう。4号墳石室の特徴は横穴式石室編年検討がなされている本庄、児玉地方では、胴張り石室の古いタイプとみることができる(註8)。4号墳の外観は先に挙げたように県北~群馬県地方の古墳と密接な関係があり、したがって本庄、児玉地方の変遷と深くかかわるものと考えられる。児玉町長沖古墳群では胴張り石室の古いタイプとして8号・21号墳が挙げられている。これらは先に挙げた4号墳石室の特徴と共通する部分も多く、又これら以後の石室には埴輪をもたなくなるので、6世紀後半~7世紀初頭(長沖8号)7世紀前半の埴輪の消滅する前後(長沖21号)の年代幅に4号墳をおさめることができよう。

以上のように1号墳と4号墳を位置づけると古墳分布状況の観察から築造年代は次のようになる。まずC群の16号→13号→12号→(11号)の埴輪を有する定形周堀の古墳は12号が消滅直前だとしても6世紀後半と考えられる。B群は4号→5号が想定され、5号は7世紀前半におさまる。埴輪をもつ7号は4号に含んでもよいと思われる。あるいは近隣に継続するなら4号→5号に対応して7号→6号も考えられる。A群の3号は埴輪をもち、かなり大規模な古墳で「ハチマキ塚」といわれたというからあるいは4号と同じ墳丘構造であったと思われる。年代も差がないであろう。1・2号は前後関係は不明だが、7世紀後半の古墳で、定形化した周堀をもっている。定形化的要素は、C群(16・13・12・11号)からの系統と考えられるが、B群の不定形周堀古墳は4・7号を中心としてかなりかたまっているようにもみえる。C群・A群タイプとは異なった古墳が集まっている。不定形周堀は必ずしも墳丘構造の粗雑さを意味せず、4号のような整備された古墳が生まれているので新來の何らかの同質集団の基盤として継続占地されていったものと考えられる。

なお、7号墳周堀に接して箱式石棺状内部主体が検出されているが、これは同種類似のものが主として群馬県地方で多く発見されている。箱式棺状(竪穴式系)内部構造(註9)、竪穴式石槨(註10)、竪穴系主体部(註11)などと呼ばれている。竪穴系石室(蹠櫛)(註12)という名称使用もあ

る。ここでは一応遺体（あるいは骨のみか）を納める狭い棺の一種ということで箱式石棺と仮称しておく。その特徴は、①短辺に1個、長辺に数個の礫を1～2段積んで四周を構成する。②天井は石蓋が推定される。③後ごめは若干の礫と土のみである。④地山を切り込み、そのプランは周壁と大差ない。⑤埋葬主体構造として狭く、浅く短かい。⑥定型化した埴丘その他の外部施設は無い。これらは古墳の内部主体として検出されるものが多いが、単独で発見されるものの類例として群馬県高崎市大應寺古墳（註13）、同県太田市小谷場1号墳（註14）、同県前橋市オブ塚西古墳（註15）、本県では寄居町北塚星遺跡（註16）、東松山市駒塚1号墳（註17）等がある。古墳時代初頭から出現するが、遺物を出土しない例が多く、また構造等も差があり、通例の古墳との関連等多くの問題が未解決である。当遺跡例では7号墳との関係は微妙なところであるが、周囲プランがわずかにかかるており、これによって北東部がやや崩れたものと考えて7号墳より古いとした。

（小久保 滌）

註

- 註1 小久保徹「桜山古墳群について」桜山古墳群 日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告
V 1981
- 註2 菅谷浩之他「青柳古墳群発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第19集 1973
- 註3 菅谷浩之他「広木大町古墳群発掘調査概報」 1975
- 註4 埼玉県教育委員会「埼玉県埋蔵文化財調査年報（昭和55年度）」 1982
- 註5 群馬県立博物館「富岡5号古墳」 1972
- 註6 増田逸朗他「啄木山古墳群」関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告VI 1977
- 註7 柳田敏司他「鹿島古墳群」 1972
- 註8 山崎武「造構と遺物のまとめ 2主体部」長沖古墳群 1980
- 註9 尾崎喜佐雄「人穴と堅穴式系内部構造」横穴式古墳の研究 1966
- 註10 松村一昭「赤堀村峯岸山の古墳1・2」 1975・1976
- 註11 松本浩一「空沢遺跡」 1978
- 註12 (註18) 同じ
- 註13 尾崎喜左雄「棺桜」新版考古学講座5 1970
- 註14 (註13) 同じ
- 註15 尾崎喜左雄「豪族の支配と古墳の構造」前橋市史第一巻 1971
- 註16 鈴木敏昭・市川修「北塚星遺跡の調査」第13回遺跡発掘調査報告会発表要旨 1980
- 註17 栗原文藏他「駒塚」関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告II 1976

円筒埴輪について

本遺跡の円筒埴輪は、各古墳の遺存状態にもよろうが、その大半は4号墳及び16号墳から検出された。ここでは形態を中心に、両墳のものを比較検討していきたい。

(1) 計測値から

全体の形状が判明するものは、わずかに4号墳に2個体、16号墳に4個体を数えるのみである。そこで、底部より第一突帯まで残存するものの18個体を補い、グラフにその計測値を打点した。(第128図)。グラフのY軸は器高、X軸は $\frac{口徑+底徑}{2}$ 、-X軸には $\frac{底徑}{2}$ をそれぞれ表わしている。但し、第一突帯までの残存体は、突帯直下までの高さと同所径を代入してある。このグラフより、両墳の埴輪は7つにグルーピングが可能かと思われる。

すなわち、

A 4号墳出土で完形復元されたもの。

グラフはほぼ二等辺三角形を呈し、底径：口径：器高の比はおよそ1:2:4となる。1・

2(図版番号と同、以下同)がこれにあたる。

B 16号墳出土で完形復元されたもの。

A同様に二等辺三角形を呈するが、三者の比は1:1.8:2.6となる。1~4がこれにあたる。

C 4号墳出土で第一突帯まで残存するもの。

突帯高は平均約24.2cmを計り、同所径と底径差は大きい。5・6・8・9がこれにあたる。

D 4号墳出土で第一突帯まで残存するもの。

突帯高がCよりも低く(平均約21.7cm)、同所径と底径差は大きい。3・4・7がこれにあたる。

E 4号墳出土で第一突帯まで残存するもの。

突帯高が不定で、グラフ右象現に対して左象現が大きく偏り、突帯直下径と底径差がほとんどないことを示している。22~24がこれにあたる。

F 16号墳出土で第一突帯まで残存するもの。

突帯高は平均約10.4cmを計り、同所径と底径差は小さい。5~10がこれにあたる。

G 16号墳出土で第一突帯まで残存するもの。

突帯高は平均約8.0cmを計り、同所径と底径差は小さい。12・13がこれにあたる。

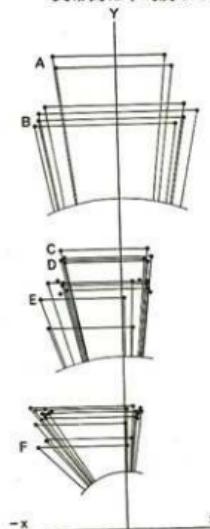
の各グループである。

さらに完形復元されたA・Bの両グループについて、その第一突帯直下の各計測値を打点した。その結果、DはAに、FはBにそれぞれ包括されることが判明した。

次に、グラフに表われた各グループについて補足したい。まず4号墳の3グループであるが、A(D)・Cの二者とEは内面調整にその相違が明確である。すなわち、A・Cの調整が刷毛を用いるのに対し、Eは布を用いるという点である。出土遺物の項に述べたように、この点及び第一突帯直下径と底径差がほとんどないことは相俟って、Eが普通円筒埴輪ではなく、むしろ形象埴輪(人物・太刀等)の基台部、もしくは朝顔形円筒埴輪の基部であることを示しているといえよう。

しかし、AとCはその胎土・焼成・色調をはじめ、製作技法の面からも明確な相違は抽出できず、逆に共通点を多く指摘することとなる。グラフに表われたように、第一突帯位置の高低差が唯一の相違点であるが、これが何に起因するのかを明示することや、A・Cを2つに類型化することは困難といえる。

16号墳には2グループが見られるが、この違いは器種の違いに表わ



第128図 三ヶ尻林遺跡円筒埴輪計測グラフ

れている。B (F) は普通円筒埴輪であり、G は朝顔形円筒埴輪である。G はグラフの特徴以外にも、①円孔がB は第二段であるのに対し、G は第三段に位置し、②突帯間隔はB の約12cm に対し、G は約8~10cm と狭いことが挙げられる。

以上をまとめると、4号墳では普通円筒埴輪 (A・C) と形象埴輪基台部 (朝顔形円筒埴輪E) に、16号墳では普通円筒埴輪 (B) と朝顔形円筒埴輪 (G) に各々分類された。A・C については分類する積極的条件がないため、これを同一視したい。

(2) 普通円筒埴輪

前段のように、両墳内の普通円筒埴輪は一つの齊一化した形として把握できた。ここではグラフに表われなかった円孔、突帯の形状について、その比較を加えてみたい。

・円孔

両墳のものとも第二段に一对が穿孔される。4号墳のもの (A 以下同) は直径4.5~5.2cm の円形を呈し、16号墳のもの (B 以下同) はタテ6.3~6.9cm 、ヨコ7.5~8.4cm のかなり大きい横円形を呈する。これは器体の幅 (胴径) に関係したものと考えられる。尚、円孔はヘラで切り取ったままのもの、その後に撫で調整されたもの、の2種類があり、この点は両者に共通している。

・突帯

いずれも2本が貼付され、器体を三段に分割している。断面形は、A が狭く崩れた台形から丸味の強い三角形を呈し、B は広い台形からM形を呈する。これは撫で付けの差によるものと考えられる。すなわち、A はまず親指と人差指で上端部と側面を調整し、次いで人差指一本で下端部に調整を施すものである。B は先の二指に布をあて、はじめに上端部と側面を、次に側面と下端部を別途に調整するものである。B のうちM形になるものも基本的には同じで、指の角度と力の具合に關係したものと判断される。

突帯の位置はグラフでもふれたが、埴輪のプロポーションに強く関連していると思われる所以、再度比較の対象としたい。グラフから伺えるように、A は細身で不安定な器体、これに高位置の突帯を備える。これに反し、B は太身でどっしりとした器体、そして低位の突帯となっている。この組み合わせに見る両者はまさに対称的であり、ここに何らかの製作意図が潜在していると考えられる。言うまでもなく、埴輪は本来『墳丘に樹立する』ことを目的としたものである。4号墳の出土状態はこれをよく示している。出土状態でさらに注目されるのは、円形に配列された各埴輪が、墳丘に第一段中央辺までを埋め込まれていることである。これこそが埴輪製作上の目的的な姿であろう。第一段下半が墳丘に『埋設』されることとは、「不安定な器体」を安定させ、かつ突帯位置が高い理由をおのずと明確にしよう (墳表との境界位置にくる突帯は既に消失している)。一方、16号墳は墳丘が遺存せず、出土状態からは配列された姿を伺えない。4号墳と同様に、第一段下半を墳丘に埋め込んだのであろうか。しかし、この姿は器体のバランスから見て否定的である。すなわち、4号墳では地上に出た部分の比率 (墳表~第一突帯 : 第一突帯~第二突帯 : 第二突帯~口縁) がほぼ均等となるが、16号墳ではこれがかなり偏ってしまう。これはやはり先述のように、両墳の埴輪が対称を示していることにこそ大きな意味がある。4号墳の埴輪は細身・不安定・高位置突帯であり、この第一段下位を墳丘に『埋設』するものとした。この姿から逆接的に考慮して、16号

墳の太身・安定・低位置突帯の埴輪は、墳丘という象徴化された不可触領域内への樹立觀念が、より強く工人に意識され、單に墳丘に『置設』されたものと理解したい。

(3) 朝顔形円筒埴輪

16号墳ではグラフのGがこれにあたるが、4号墳ではEにその可能性を指摘できるものの、明確にすることはできなかった。そこで、両墳に見られる朝顔部と頸部について比較したい。16号墳出土の11は口径約31.0cmで、かなり大きく開くものである。全体的には外反する形となり、口縁部ではさらにつがくなる。頸部の突帯（くびれる部位のもの）は12に見られるように。他の部位のものとは異なる。断面は三角形を呈し、布は用いずに親指と人差指で一度に撫で付けている。これは強くくびれた位置において、同方法を取らざるをえないためと思われる。また、4号墳出土の28は口径31.1cmで、全体は受口状を呈する。口縁部はよく外反するが、以下はゆるく内湾している。頸部の突帯は他と同様の成形、調整となっている。

次に4号墳のEグループについて若干ふれておきたい。尚、グラフには示せなかつたが、遺物実測図25～27も底径・内面調整が共通しており、この中に含まれる。Eは朝顔形と判断できる積極的要素を欠くが、反面これを否定する決定的な要素もない。内面に布撫でを施す点では、朝顔形の肩部・人物の胴部・太刀形の鞘部についても指摘できる。また、器径すなわち底径という点については、全体を把握できる朝顔形と形象が残存していないため、その検証の余地がない。このように、Eがどちらに属すかは明示しないが、ただ、出土位置図には示唆深い事実が見い出せる。やや点数不定であることは否めないが、位置図7・8（遺物実測図24・26）の間隔は24・25（同23・22）の約2倍となっている。さらに15（同25）もこの間隔比上に位置する。これはEグループの埴輪がある一定の規則性（おそらく24～25間が最小単位）のものと、その配置がなされたことを意味しよう。

以上、極めて簡略ではあるが、4号墳と16号墳の円筒埴輪について比較してみた。尚、形象埴輪についてはいずれも断片的な資料であり、全体の形状や製作技法には不明な点が多い。ここでは、

- (1) そのほとんどが4号墳から出土したこと（古墳の遺存状態による）。
 - (2) 人物埴輪・動物埴輪（馬）・家形埴輪・器財埴輪（鞆・太刀）が確認されたこと。
 - (3) 卷紐を握る腕・写真図版34の中空の腕（県内では東松山市桜山薙跡群・行田市埼玉稻荷山古墳等に見られる）の特殊性。
 - (4) 馬脚下部を一枚の粘土板で円筒状に成形するという特徴的な製作技法。
 - (5) 太刀鞘部の紐飾りや残存部の形状は、花園村黒田古墳群内17号墳出土のものに似ること（本遺跡のものは勾金と三輪玉であると断定できないが、两者であるならばこれも似ている）。
- を指摘するにとどめる。

（飼持和夫）

引用・参考文献

- 群馬県教育委員会 1980『塚廻り古墳群』
 埼玉県 1982『新編埼玉県史資料編2原始古代（弥生・古墳）』
 埼玉県教育委員会 1980『埼玉稻荷山古墳群』
 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982『日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告書VI桜山

窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集

埼玉県遺跡調査会 1980『広木大町古墳群』埼玉県遺跡調査報告第40集

鴻巣市遺跡調査会 1981『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会報告書第2集

三ヶ尻林遺跡出土の須恵器の年代と派生する問題

三ヶ尻林遺跡からは1・3・4・5・7・8号墳および1号堅穴造構から土師器・須恵器が出土している。土師器については、三ヶ尻天王遺跡の土師器と共に既に考察してあるので、ここでは、4号墳の4個体の須恵器を中心に述べておきたい。

4号墳の出土品は大甕・提瓶・短頸壺・高杯である。まず大甕であるが、口縁部に4段の櫛描波状文、頸部に補強帯をもつことが大きな特徴である。頸部に補強帯をもつ甕は、酒井清治氏が詳細に論じられているが、北関東に分布の中心があり、6世紀中葉～8世紀初頭の年代幅を考慮されている（註1）。酒井氏の紹介されたものの中では、大久保山遺跡・十二ヶ谷戸古墳群などの例に近い特徴をもつ。提瓶は口縁部に2条の沈線をもち、單口線で、肩部に鉤状突起の把手をもち、片側ははずれている。陶邑の製品でみると、輪状把手から鉤状へ省略されるのは第II型式第4段階であり、第5段階にはボタン状貼付に変化してしまう（註2）。短頸壺も肩の張る形態で第II型式第4段階のそれに類似する。高杯は無蓋高杯で、やや長脚の一筋三方透しを特徴とする。無蓋高杯としてはこのような形態のものは陶邑では見当らないが、据部を下に折り込んで段状に仕上げる特徴や杯部の段の作りなど新しい段階の特徴と見られるものも多い。三方透しは陶邑では第II型式第3段階には既にあるが、一般化するのは第4段階以降のようである。

以上から考えられることはまず第一に、補強帯を持つ甕・据部を折り込む無蓋高杯など地域性の強い器形と短頸壺・提瓶のように陶邑の影響下に作られる器形との共存が注目される。地方窯成立後これ以外にも多様な器種・器形が地方に普及するようになるが、埼玉においても、7世紀初頭以降は多数の在地窯製品が目立つ。林4号墳の4個体は前述の検討から陶邑第II型式第4段階併行期前後、実年代では6世紀第4四半期前後に、短期間に入手された可能性を考慮することができるが、6世紀終末期にあたる時期に關東北・西部の在地窯製品を含む例は現状ではまだ少ない。胎土や焼成のあり方を見て、末野窯跡群や南比企窯跡群の製品でない可能性も強い。この4個体は三ヶ尻の小首長層がかなりの遠隔地まで須恵器入手するため移動するか、關東北部や東海東部の初期的地方窯の工夫とその支配者層がかなりの遠隔地交易をしている結果、当地に招来してきたと思われる。私見では前者の可能性が強いと見たい。

第2に技術的問題であるが、提瓶の胴部に沈線の二重円が二重に同心円状に施されること、高杯据部の折り込みなど、独特の手法で作られるもの、甕の補強帯のように、後に陶邑で採用されるもの、短頸壺や提瓶の回転ヘラケズリのように、陶邑の技法が採用されるものなどが混在しているが、仮に、埼玉にこの時期の窯跡があった場合（あるいは群馬でもよいかもしれないが）、必ずしも須恵器の専門工人が多数存在するのでなく、別種の器物を作る工人も含めて再編成され、多様な技法を須恵器に持ちこんだ証左になろう。当時のある種の社会的分業を考証する上で、充分参考にしなければならないであろう。

（利根川章彦）

註

- 註1 酒井清治 1981「房総における須恵器生産の予察（I）」『史館』第13号
酒井氏の考察を参考にする限りでは、三ヶ尻林4号墳例は坂並白貝18号墳より古く、富岡5号墳よりは新しい。6世紀後半代のやや新しい段階と見てよいと思う。
- 註2 中村 浩 1981『和泉陶邑窯の研究』等

切子玉の製作について

三ヶ尻林遺跡4号墳石室内からは種々の副葬品が出土しているが、その中でも特に切子玉の製作と鉄鎌について若干の考察をしてみたい。

切子玉は4号墳・5号墳を合わせて10個の出土があった。無論水晶かトバーズを原材としているものと考えられるが、その形状からは一定の製作過程をたどったと思われる規則性が伺える。切子玉はその表面に上下6面ずつ12面の台形を呈する面と、孔の穿たれた上下の2面の計14面から成っている。表面の12面は台形を呈する個々の面が上下に6面ずつ一端を接して、いわゆるソロバン王状になる。この表面にはよく観察すると一面ずつに研摩の痕跡と思われる線状痕が認められる。線状痕は上下のものを含めて孔に対しては垂直に交わる、横方向をとるものが多い。この線状痕と面の切り合いによってその製作過程における時間差を知ることができる。まず最も多いのは実測図では表面の下面→上面の左から右面へとたどる製作順である。これが10例中7例存在する。それ以外では上面の右面から左面の方向になるものが1例（資料番号309）、不明のもの2例である。しかもその時間差は明らかではないが、7例のすべては大形の孔が上に、小形が下に位置しており穿孔までの工程が一定の手順のもとに行なわれたことを示している。まさに手慣れた職人の仕事を見る思いである。

鉄鎌について

4号墳石室の東壁ちかくからまとまって出土した鉄鎌がある。次にこの鉄鎌について述べてみたい。鉄鎌は10本が一束のようになって出土した。資料番号の12・13・14・15・16・17・18・19・20・21がそれである。外形をさぐると身の形の不明な1例（12）を除くと、尖根の片刃が6例（13～15・18・20・21）、両刃が2例（17・19）、直剪鎌風のもの（16）が1例ある。これらは出土状態において茎の位置がほぼ一致する。このことは身の外形に関係なくおそらく矢柄の長さが同じであったことを示し、またそれが一束のものとしてまとまっていることから矢束ねか、身の状態からおそらく剣に入れられて副葬されたものと思われる。この場合10本を一単位としてまとめられたすると、刃先の直線的な1例（16）は他の鎌との関係においてどのように考えられるべきだろうか。ほぼ同一形状の片刃・両刃の9本が、消耗を前提とした量的な存在、すなわち実用品だとすると、特異な形状の一例は儀礼的な存在なのだろうか。鎌の出土状態に関してはより詳細な記録の作成と観察とが必要となろう。

(田中英司)

三ヶ尻林遺跡D区の溝と出土遺物について

台地斜面下に検出された2本の溝は種々の点において差異が認められる。1号溝は台地の斜面下の荒川の氾濫原の自然堤防上にあり、場所によれば耕作土の下は疊層となっている個所もある。この溝は疊層を意識的に避けて構築された可能性が高く、溝の底面や立ちあがりなどからも自然の河

川ではないと考えられる。また覆土は攪乱のため判然としない面もあるが、土層を観察すると全体的には黒褐色土～暗褐色土によって大部分が占められ、砂利を含み粘性に富んだ土層が、南側から数度に亘って流れ込んだ様相を留めている。溝の底面付近の土層は少しローム質の粘土が含まれ、砂質土層がほぼ水平に堆積している。遺物の出土層位は中層から上層に多く集中しており、溝底面からは出土しなかった。しかし、溝底面付近の水平堆積層には少量であるが遺物は含まれており、溝が構築されてから、機能している間の時間的下限は大まかであるが押さえられよう。

2号溝は1号溝にくらべてその幅や深さは変化に富んでいる。遺物は覆土の上層に浮いた状態で出土しており、中・下層には皆無であった。覆土の殆んどを構成する砂利を含む層は1号溝で見られる南側から流れ込んだ層である。2号溝の場合1号溝のように疊層を避けて構築はされず、疊層とローム層を分断する形で造られており、しかも掘り込みは浅く流入土層の掘りがえしではないため、一気に流れ込んだ砂利混入土層によって、溝の機能は比較的短期間に停止してしまったと考えられる。

次に出土遺物について検討してみたい。1号溝及び2号溝から出土した遺物は図示した土師器坏、燈明皿、擂鉢のほか培焰、鉄片、埴輪などである。出土遺物の多くは小破片であり、特に土師器坏、燈明皿などは磨滅が進行しており、整形痕を留めていないものが、殆どであった。ここでは少量であり、資料として不十分な面もあるが、1号溝の機能していた時期の下限を押さえるのに有効とみられる土師器坏（第128図2～8）を中心に簡単に述べてみたい。

土師器坏はいずれも直径12～13cm、器高3cm程を測り、国分期初段階の範疇に含まれるもので、大きく以下のタイプに分けられる。口縁部は短かく、内湾し、丸底の器形（第128図2～4・8）と口縁部は短かく、内湾気味に外傾し、底部は平底に近い器形の2タイプである。3と4の底部は器内にばらつきがみられ、平底に近いことから後者につながると考えられるものである。これらの坏は形式的には幾分、真間期の様相を留めているが、形態などから9世紀第1四半紀を主体とする土器群と考えられる。これらの坏の類例は應谷市樋の上遺跡（註1）出土の土師器坏に求められるが、この溝と樋の上遺跡は比較的隣接する位置関係にあることからこの溝の性格を考慮する上で関連付けが重要となろう。また、他の土器については覆土の上層、あるいは攪乱土層より出土したものであり、第128図1や13のように鬼高窓の坏や美濃系の擂鉢の破片なども混入しており、溝の年代を位置づける資料とは成り得ない。

以上、前述した土器群の型式的年代観から、1号溝の機能していた時期を推察するとその下限を9世紀前半と考えられ、以降は溝としての機能を失ったものと思われる。2号溝は3箇所にわたって近世の墓壙や攪乱に切られているが、出土遺物から近世頃に入って構築されたと考えられるが、その上限については1号溝同様、不明である。

(星間孝志)

註

註1 樋の上遺跡は県立熊谷西高建設に伴なう事前調査として昭和50・51年度は埼玉県教育局文化財保護課、昭和52年度は埼玉県立さきたま資料館によって3次に亘る調査がされ、古墳時代後期から平安時代の集落跡が確認されている。遺物については県立さきたま資料館の御厚意により実見する機会を得た。

X 付 篇

三ヶ尻林遺跡古墳出土の人骨について

森 沢 佐 戒 (富山医科大学医学部)
(第一解剖学教室)

この遺跡（所在地：熊谷市三ヶ尻林裏3289他および字林3389他）の調査は埼玉県教育委員会が主体となり、昭和54年5月7日より昭和55年2月15日に行なわれ（1号墳～5号墳）、その後も引き続き6号墳、7号墳の精細な調査が行なわれた。そのうち、人骨は4号墳、7号墳の各玄室内より出土している。すなわち、4号墳出土の人骨はおもに玄室内左側の疊床上または疊間より不規則に分布し、その出土位置により17群（B₁～B₁₇）に分けられ、その他、玄室の土砂より人骨〔一括〕が検出されている。また、7号墳より歯が2個出土している。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団より人骨の調査を依頼されたので、概略を報告する。

I. 4号墳出土の人骨

骨表面の色調は黄白色または黄褐色を呈し、一部の骨表面には淡緑色域〔B₄、B₅〕、暗褐色の斑点部〔B₁₁〕が認められる。大部分の骨表面には腐蝕による凹凸が認められ、骨質の薄い長骨の骨端部や、頭蓋骨の板間層は露出または消失している。骨質は脆く、骨の大部分は細片化している。また、骨表面には生前の傷痕や埋葬後的小動物等による咬痕は認められない。骨の諸形質から、これらの骨は人骨の一部分と思われ、獸骨ではない。

玄室の出土位置による人骨群〔B₁～B₁₇および一括〕の所見を以下に述べる。

1. 人骨群〔B₁〕

この人骨群は側頭骨（右）の外耳道上壁部1個および頭蓋骨數十片である。骨表面の腐蝕が強く、他の人骨の特徴は不明である。また、骨質はいずれも脆い。

2. 人骨群〔B₂〕

この人骨群は前頭骨の右眼窩上縁部、左ブレグマ部。頭頂骨（左右）のブレグマ部、後頭骨の左後頭鱗、左外側部、側頭骨（右）の錐体部、外耳道周辺部の各々1個および頭蓋骨數十片である。骨質は堅く、骨表面の腐蝕は他の人骨群より少ない。骨の欠損端の周囲には造骨現象は認められない。

前頭骨の左ブレグマ部、頭頂骨（左右）のブレグマ部の3個の骨は互いに縫合線で合致する。これらの骨によって構成される矢状縫合や冠状縫合の癒着は少なくともブレグマ部において内板、外板とともに認められない。また、前頭骨の左ブレグマ部のほぼ正中位には前頭縫合の開存（十字頭蓋）を疑わせる縫合線が認められる。前頭骨の右眼窩上縁は薄く、その辺縁は鋭利であり、前頭面も平坦である。左後頭鱗の外面には上下方向に走る低い1稜が認められ、内面の左S状洞溝は浅い。側頭骨（右）の外耳孔の形態は橢円形または卵円形で、その後方に残存する乳様突起の基部は小さく、外方への膨隆は少ない。

3. 人骨群〔B₂〕

この人骨群は大腿骨（右）の骨幹中央部1個とその破片数片である。

大腿骨（右）の骨幹は細く、粗線の発達は弱い。

4. 人骨群〔B₄〕

この人骨群は頭頂骨（左？）の鱗縁部1個および頭蓋骨數十片である。骨表面には淡緑色または黒褐色域が認められる。いずれも細片であり、その他の詳細な特徴は不明である。

5. 人骨群〔B₅〕

この人骨群は前述の人骨群〔B₂〕の近くより青銅製腕輪を伴って出土する人骨群であり、上顎骨（右）の上顎骨体と前頭突起の一部、尺骨（左）の近位骨幹約 $\frac{1}{3}$ 、上腕骨（左？）の遠位骨幹前面部の各々1個および頭蓋骨、上肢骨各數片である。骨質は堅く、骨表面の腐蝕は比較的少ない。これらの頭蓋骨表面の一部、上肢骨表面には淡緑色域と黒褐色斑が認められる。

尺骨（左）の骨幹上部は左右に扁平（扁平尺骨）であり、尺骨粗面は内・外側に縱の2稜を形成し、粗面中央部は陥凹している。また、骨間縁の発達は強い。一方、上顎骨（右）は小さい。

6. 人骨群〔B₆〕

この人骨群は頭蓋骨數十片である。骨の内板、外板は薄いようであるが、骨表面の腐蝕は強く、その他の特徴は不明である。

7. 人骨群〔B₇〕

この人骨群は前述の人骨群〔B₆〕の近くより永久歯〔3、3、4、4、4、7〕の歯冠6個出土している。

歯冠はいずれも小さく、歯の咬耗は認められない（Martin の0度）。すなわち、上顎右第一小白歯〔4〕と上顎左第一小白歯〔4〕は同等大である。

8. 人骨群〔B₈〕

この人骨群は前述の人骨群〔B₁〕の近くより永久歯〔4、5〕の歯冠2個出土している。

歯の咬耗はほとんど認められないが（Martin の0～1度）、上顎右第一小白歯〔4〕は人骨群〔B₇〕〔4、4〕より大きい。

9. 人骨群〔B₉〕

この人骨群は大腿骨（右）の近位骨幹（約 $\frac{1}{3}$ ）1個とその破片數十片である。

骨幹の緻密質は厚く、粗線に続く殿筋粗面は粗造である。また、骨幹上部は前後に扁平を思わせ、この大腿骨はいわゆる柱状大腿骨でない。全体として頑丈である。

10. 人骨群〔B₁₀〕

この人骨群は前述の人骨群〔B₉〕の近くより出土し、大腿骨（左）の遠位骨幹（約 $\frac{1}{3}$ ）1個とその破片數十片である。

骨幹後面などは破片のため不明であるが、この大腿骨は全体として頑丈である。

11. 人骨群〔B₁₁〕

この人骨群は胫骨（右）の遠位骨幹（約 $\frac{1}{3}$ ）1個とその細片と思われる。

骨幹は太く、頑丈である。

12. 人骨群〔B₁₂〕

この人骨群は側頭骨（右）の錐体部1個および体幹骨數十片である。

側頭骨（右）は人骨群〔B₂〕とは明らかに別個体である。体幹骨片として、肋骨、椎体の一部がみられ、これらの体幹骨の海綿質は他の人骨群と比較してよく保存されている。肋骨頭や椎体下面の骨核は完全に癒着している。椎体辺縁には異常な骨増殖が認められない。肋骨体は厚いようである。

13. 人骨群〔B₁₃〕

この人骨群として、永久歯〔7〕の歯冠が1個出土している。

歯冠は大きく、歯の咬耗は進み、象牙質の一部が露出している（Martinの2度）。

14. 人骨群〔B₁₄〕

この人骨群は永久歯（大臼歯）の歯冠1個および体肢骨の細片數十片である。

大臼歯の歯冠の一部であり、わずかに咬耗が認められる（Martinの1度）。

15. 人骨群〔B₁₅〕

16. 人骨群〔B₁₆〕

いずれの人骨群とも体肢骨の細片であるが、詳細は不明である。

17. 人骨群〔B₁₇〕

この人骨群は永久歯〔4〕、〔5〕の歯冠2個と頭蓋骨の細片1個である。いずれの歯冠とも咬耗は認められない。下顎右第一小白歯〔4〕は人骨群〔B₇〕の下顎左第一小白歯〔4〕と同等大である。

18. 一括人骨群（一括）

この人骨群は側頭骨（左）の錐体部1個、永久歯〔7〕、〔6〕、〔6〕、〔5〕、〔3〕、〔2〕、〔1〕、〔5〕、〔6〕、〔7〕、〔8〕、〔7〕、〔6〕、〔6〕、〔2〕、〔5〕、〔6〕の歯冠17個、乳歯〔e〕1個および頭蓋骨や歯冠各々數片である。

上顎右第二乳臼歯〔e〕の歯根端は破片するが、その基部より3根と思われ、その歯冠の咬頭数と溝はH₄型であり、ほぼ同形態の上顎第一大臼歯〔6〕または〔6〕より小さい。歯の咬耗はわずかに認められる（Martinの1度）。

永久歯17個のうち、上顎右第一大臼歯〔6〕、下顎右第一大臼歯〔6〕は各々2個体分一括出土するほか、上顎右第二小白歯〔5〕、上顎右第二大臼歯〔7〕、上顎左第二大臼歯〔7〕は前述の人骨群〔B₆、B₁₂、B₇〕からも出土している。

これらの人骨群〔一括〕の永久歯を中心にして、上顎歯、下顎歯の歯種別に歯冠の大きさや歯の咬耗度を比較検討すると、〔5〕、〔6〕、〔6〕、〔7〕、〔8〕の5個はいずれも大きく、歯冠の一部の象牙質が露出している（Martinの1～2度）。すなわち、上顎右第二小白歯〔5〕は人骨群〔B₆〕〔5〕、人骨群〔一括〕〔5〕より大きく、上顎左右第一大臼歯〔6〕、〔6〕は同等大である。また、上顎左第二大臼歯〔7〕は人骨群〔B₇〕〔7〕、人骨群〔一括〕〔7〕より大きく、人骨群〔B₁₂〕〔7〕と同等大である。

〔2〕、〔3〕、〔5〕、〔6〕、〔2〕、〔6〕、〔6〕、〔6〕の8個の歯の咬耗はほとんど認められない（Martinの0～1度）。そのうち、〔3〕、〔6〕の2個は成人女性と同等大とみなされるが、〔2〕、〔6〕の歯冠厚、〔5〕、〔6〕、〔2〕

の歯冠幅はやや小さく、6の歯冠幅はやや大きい。また、上顎左第二小白歯（5）は人骨群〔B₈〕（5）と同等大である。

1]、7]、5、7]の4個の歯冠は小さく、歯の咬耗は認められない（Martin の0度）。また、上顎右第二大白歯（7]）は人骨群〔B₇〕（7]）と同等大である。

これらの永久歯のうち、上顎右第一・第二切歯（1]、2]）はシャベル型を呈する。上顎大臼歯5個はすべて四咬頭である。また、下顎大臼歯の咬頭数と溝の関係をみると、右第一大臼歯1個（6]）は Dryopithecus pattern (Y₄型)、左右第一大臼歯（6]、6）および右第二大臼歯（7]）の計3個はいずれも Plus pattern (+₃型)を呈する。歯の病変として、上顎左第一大臼歯（6]）の歯冠頬側面にはわずかの歯石を認めるが、いずれの永久歯ともう歯は認められない。

以上の人骨所見より、人骨群〔B₁～B₁₇、一括〕の人骨を頭蓋骨、歯、体幹骨、体肢骨の各部に分けてみる。

頭蓋骨として、おもに脳頭蓋の一部が8群〔B₁、B₂、B₄、B₅、B₆、B₁₂、B₁₇、一括〕でみられ、量的には4群〔B₁、B₂、B₄、B₆〕で比較的多い。

歯として、永久歯29個、乳歯1個が6群〔B₇、B₈、B₁₃、B₁₄、B₁₇、一括〕でみられる。そのうち、約半数以上の永久歯17個、乳歯1個は人骨群〔一括〕でみられる。

体幹骨として、肋骨、椎骨の一部が人骨群〔B₁₂〕でみられる。

体肢骨として、上腕骨（左？）、尺骨（左）が人骨群〔B₃〕、大腿骨（左右）、胫骨（右）は4群〔B₃、B₉、B₁₀、B₁₁〕、詳細不明な体肢骨は3群〔B₁₄、B₁₅、B₁₆〕でみられる。

これらの人骨はいずれも完形をなさず、腐蝕のため人骨の詳細な特徴のつかない部分骨であるが、出土人骨の位置の判明する各人骨群には重複する部位が認められない。また、人骨の出土位置より、人骨群〔B₁〕の頭蓋骨は人骨群〔B₆〕の永久歯2個、人骨群〔B₆〕の頭蓋骨は人骨群〔B₇〕と関連を持っていると思われるが、多くの骨はいずれも自然位でなく、多数個体が散乱状態で出土すると考えられるので、埋葬姿勢などの埋葬様式は不明である。すなわち、側頭骨（右）の錐体は人骨群〔B₂、B₁₂〕、上顎右第一小白歯（4]）は人骨群〔B₇、B₈〕、上顎右第二大臼歯（5]）は人骨群〔B₈、一括〕、上顎右第一大臼歯（6]）は人骨群〔一括〕、上顎右第二大臼歯は人骨群〔B₁₃、一括〕、上顎左第二大臼歯（7]）は人骨群〔B₇、一括〕、大腿骨（右）の骨幹は人骨群〔B₃、B₉〕よりそれぞれ2個体分出土する。

一方、人骨の性や年令に伴なう特徴より各人骨の関連をみると、人骨群〔B₆〕の頭蓋骨、人骨群〔B₇〕の永久歯6個、人骨群〔B₁₇〕の永久歯2個、人骨群〔一括〕の永久歯4個（1]、7]、5、7]）、乳歯1個（e]）、人骨群〔B₃〕の大腿骨（右）は同一個体で、性別不明な少年期の人骨と思われる。

人骨群〔B₁₂〕の永久歯1個、人骨群〔一括〕の永久歯5個（5]、6、6、7]、8]）、人骨群〔B₁₂〕の体幹骨および側頭骨（左）の錐体、人骨群〔B₃〕の上腕骨（左？）および尺骨（左）、人骨群〔B₉、B₁₀〕の大腿骨（左右）、人骨群〔B₁₁〕の胫骨（右）は同一個体で、壮年期（～老年期）の男性と思われる。

人骨群〔B₁〕の頭蓋骨、人骨群〔B₆〕の永久歯2個、人骨群〔一括〕の少なくとも永久歯2個

(15, 16) は同一個体であり、人骨群 (B₂, B₄, B₅) の頭蓋骨、人骨群 [一括] の少なくとも永久歯 2 個 (3, 6) は出土位置からも別個体の青年期または壮年期の女性骨と思われ、人骨群 [一括] の他の永久歯 5 個 (2, 3, 6, 12, 16) はこのいずれかの女性骨に属するものと考えられる。

以上、不明な点が多いが、4 号墳出土人骨は少なくとも合計 4 個体分と考える。

II. 7 号墳出土の人骨

人骨として、永久歯 2 個 (5, 7) の歯冠のみ出土している。

下顎右第二小白歯 (5) の咬耗はわずかに認められる (Martin の 1 度)。下顎左第二大臼歯 (7) の象牙質の一部が咬耗により露出している (Martin の 2 度)。後者の歯の咬頭数は五咬頭で、溝の形態は X 型である (X₅型)。いずれの歯とともに成人女性としてやや小さく、う蝕や歯石は認められない。

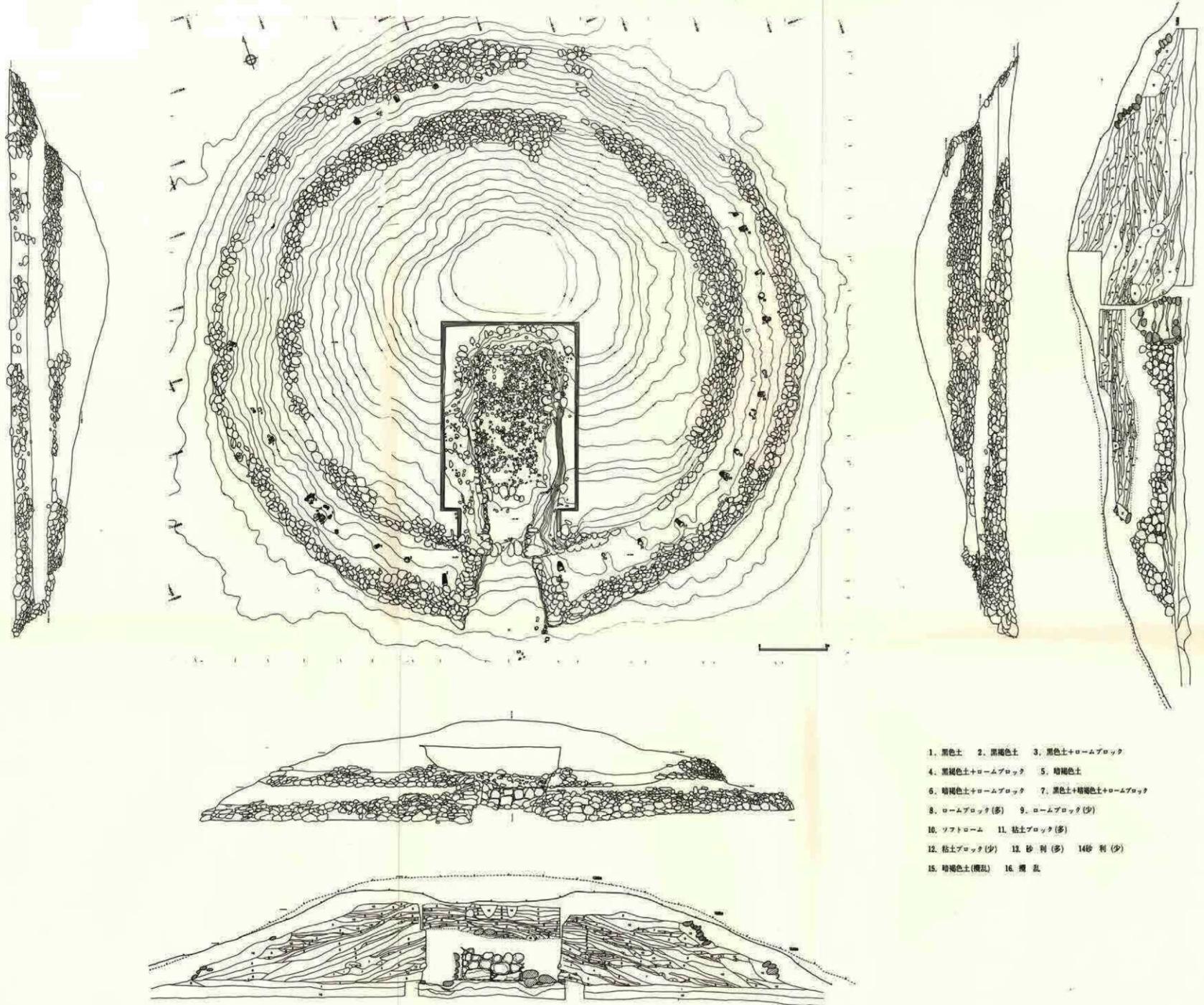
永久歯の歯冠のみであるが、歯冠の大きさや咬耗度からみて壮年期の女性に属すると思われる。

まとめ

埼玉県熊谷市三ヶ尻林遺跡 1 号墳～7 号墳のうち、4 号墳および 7 号墳出土の保存不良な人骨について、以下にまとめる。

- 1) 4 号墳出土の人骨は性別不明な少年期人骨 1 個体、青年期または壮年期の女性骨 2 個体、壮年期 (~ 熟年期初) の男性骨 1 個体の合計 4 個体分と思われる。また、7 号墳出土の人骨は永久歯 2 個のみ出土し、おそらく壮年期の女性骨 1 個体に属すると思われる。
- 2) 4 号墳出土の女性頭蓋は十字頭蓋と思われる。
- 3) 4 号墳出土の下顎大臼歯の咬頭数と溝の関係をみると、右第一大臼歯 1 個 (6) は Dryopithecus pattern (Y₅型)、左右第一大臼歯 (6, 16) および右第二大臼歯 (7) の計 3 個はいずれも Plus pattern (十₅型) を呈し、7 号墳出土の左第二大臼歯 1 個 (7) は X₅ 型を呈する。
- 4) 4 号墳出土の腕輪を伴なう人骨は男性と思われ、尺骨 (左) の骨幹上部は左右に扁平 (扁平尺骨) で、大腿骨 (右) の骨幹上部は前後に扁平と思われ、いわゆる柱状大腿骨でない。これらの特徴は古墳人骨にもみられる。
- 5) 病変として、4 号墳出土の上顎右第一大臼歯 (6) の歯冠頬側面にはわずかの歯石が認められる。

稿を終るにあたり、この研究調査にご理解とご協力をいただいた埼玉県教育局文化財保護課、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、発掘関係者および地元の皆様に衷心より感謝の意を表します。



別図1 三ヶ尻林遺跡4号墳全体図および断面図(1/50)

写 真 図 版



三ヶ尻天王遺跡3号墳



三ヶ尻天王遺跡3号墳

図版 2



三ヶ尻天王遺跡 4 号墳

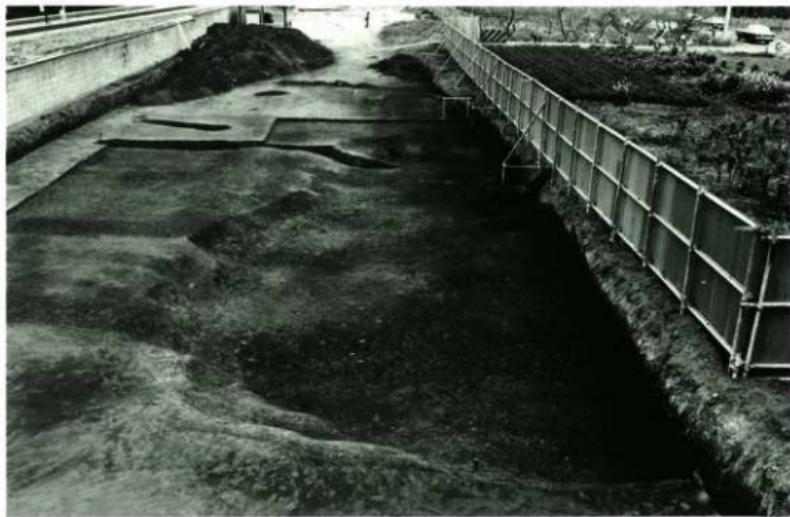


三ヶ尻天王遺跡 4 号墳石室

図版 3



三ヶ尻天王遺跡5号墳



三ヶ尻天王遺跡6号墳

図版 4



三ヶ尻天王遺跡 1号住居跡



三ヶ尻天王遺跡 2号住居跡



三ヶ尻天王遺跡4号住居跡



三ヶ尻天王遺跡5号住居跡

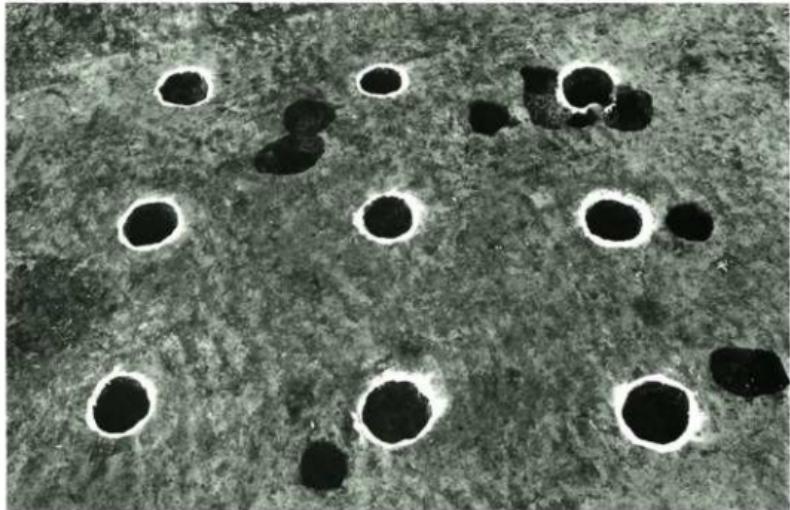
図版 6



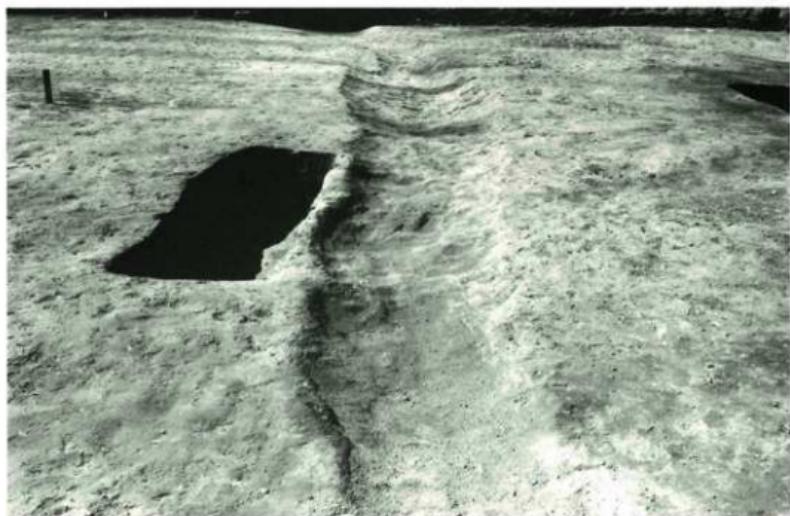
三ヶ尻天王遺跡 6号住居跡



三ヶ尻天王遺跡 7号住居跡



三ヶ尻天王遺跡 1号掘立柱建物跡

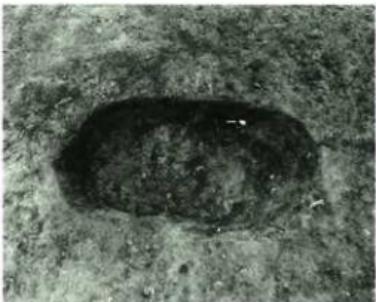


三ヶ尻天王遺跡 2号溝・74号土壤

図版 8



三ヶ尻天王遺跡5号土壤



三ヶ尻天王遺跡8号土壤



三ヶ尻天王遺跡76号土壤



三ヶ尻天王遺跡78号土壤

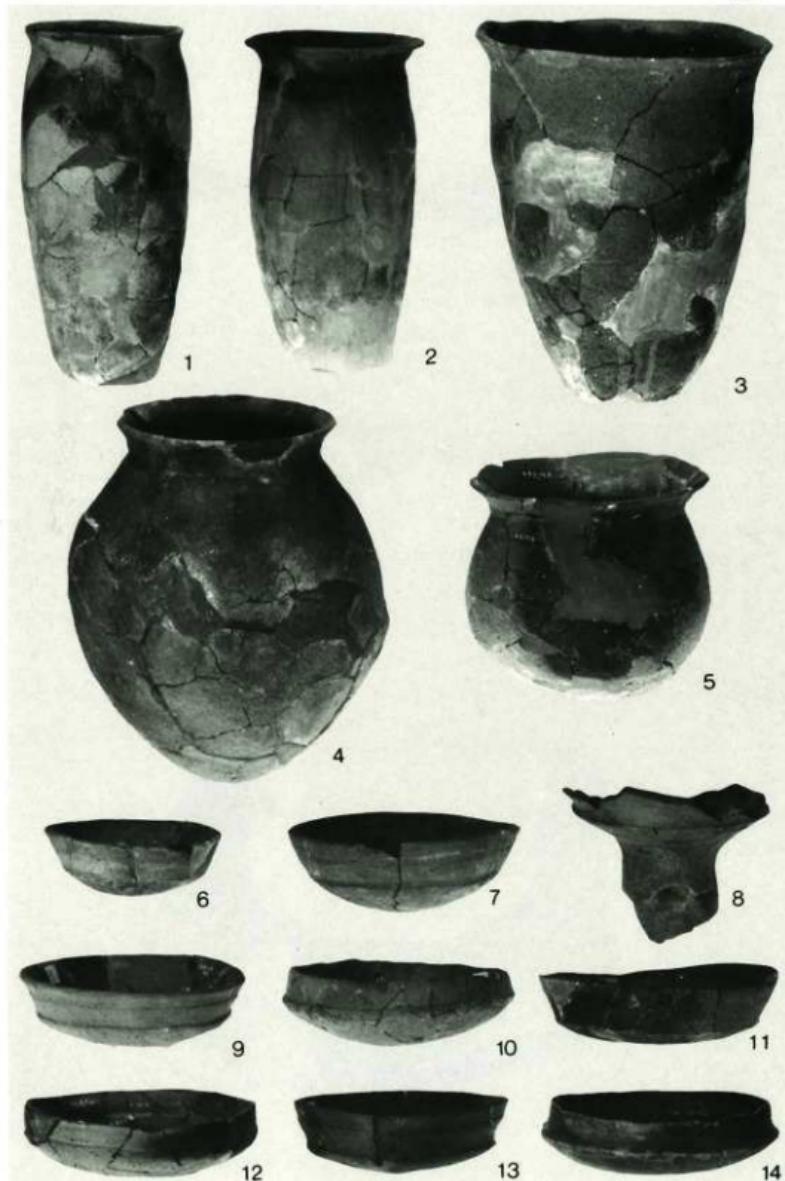


三ヶ尻天王遺跡84号土壤



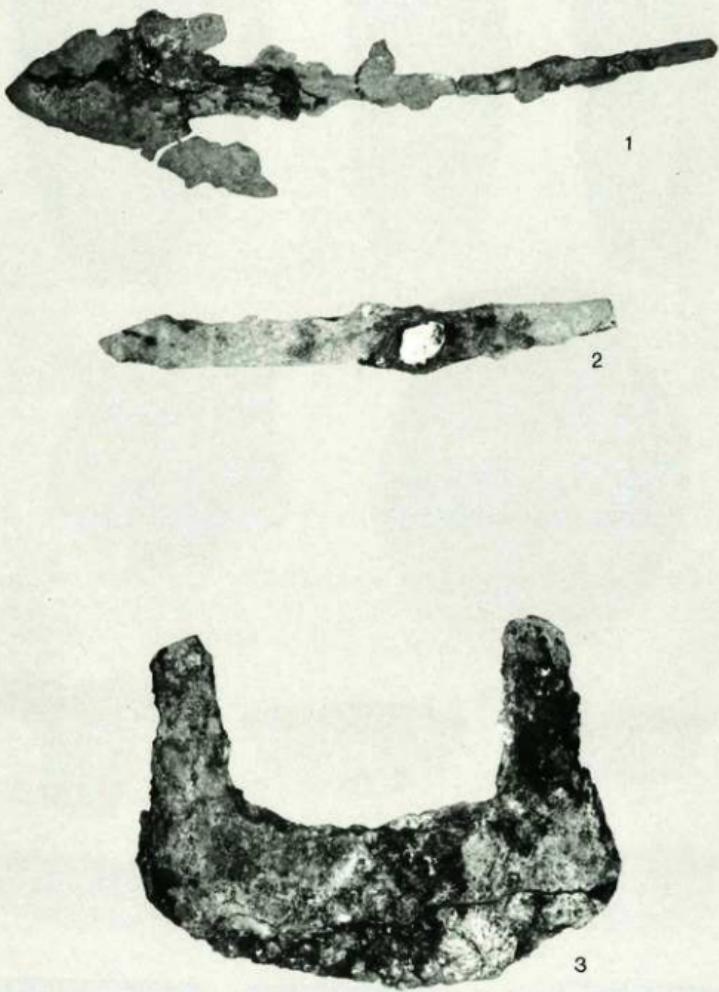
三ヶ尻天王遺跡85号土壤

図版 9



三ヶ尻天王遺跡出土土器 1 (2号墳)、2・3・14 (10号住)、4・7・9 (1号住)、10 (2号住)、
6 (3号墳)、5 (3号住)、8 (9号住)、11・12 (6号住)、13 (8号住)

図版10



三ヶ尻天王遺跡出土鉄製品 1(5号墳)、2(1号住)、3(5号住)

図版11



三ヶ尻林遺跡A区全景



三ヶ尻林遺跡A区全景

図版12

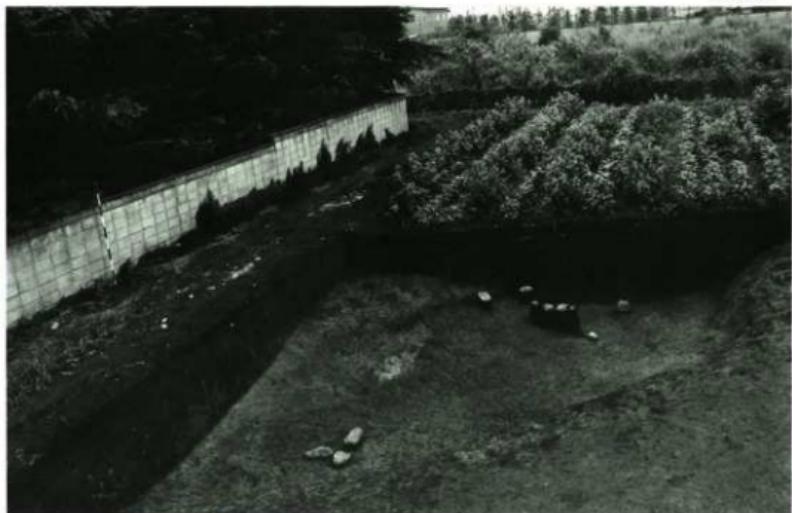


三ヶ尻林遺跡1号墳

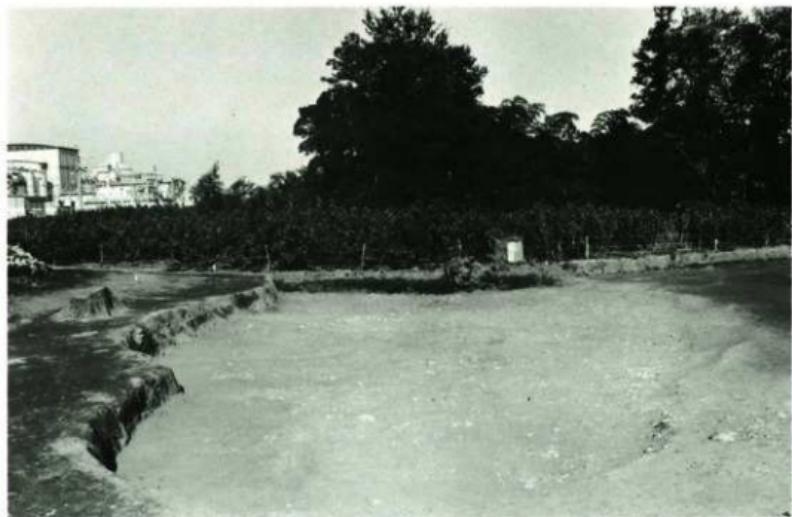


三ヶ尻林遺跡1号墳

図版13



三ヶ尻林遺跡3号墳



三ヶ尻林遺跡4号墳調査前

図版14



三ヶ尻林遺跡4号墳



三ヶ尻林遺跡4号墳全景



三ヶ尻林遺跡4号墳



三ヶ尻林遺跡4号墳

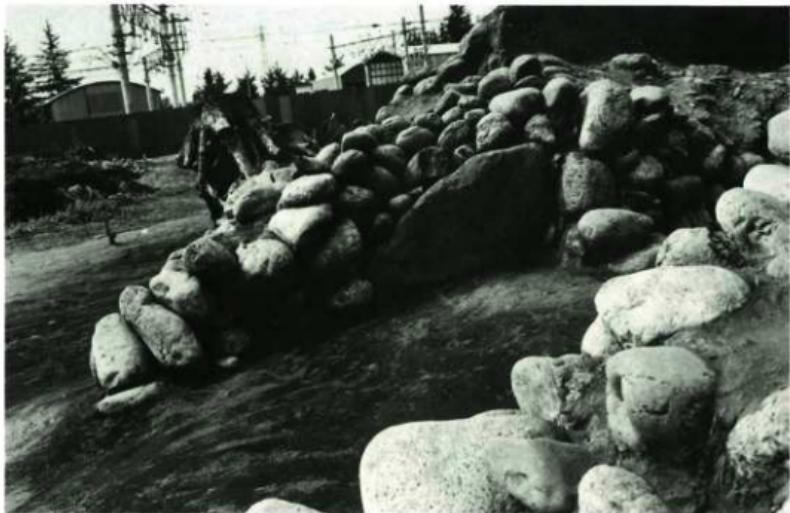
図版16



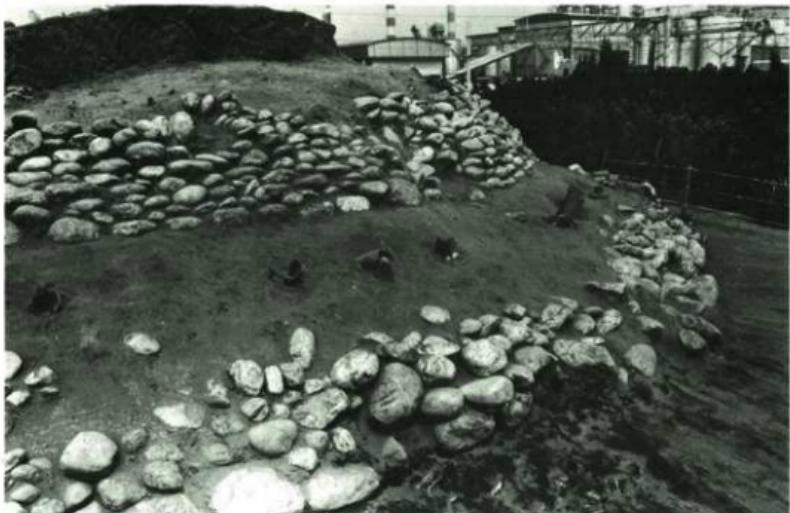
三ヶ尻林遺跡4号墳



三ヶ尻林遺跡4号墳



三ヶ尻林遺跡4号墳

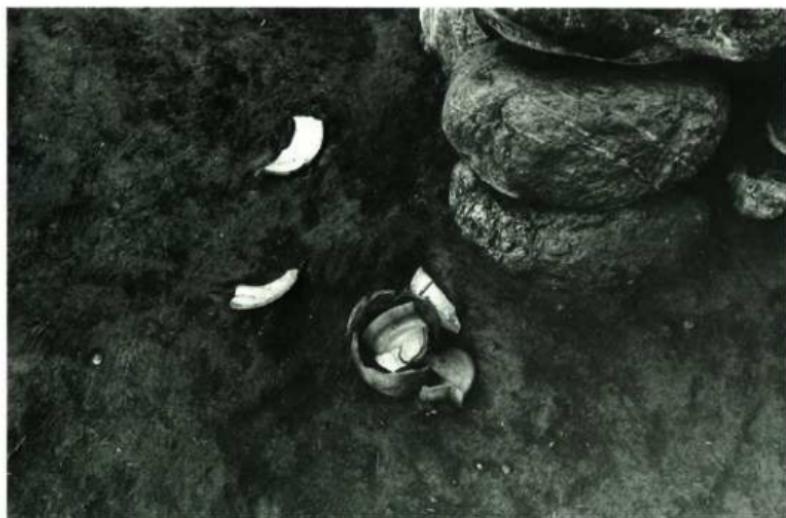


三ヶ尻林遺跡4号墳埴輪列

図版18



三ヶ尻林遺跡4号墳遺物出土状態



三ヶ尻林遺跡4号墳遺物出土状態

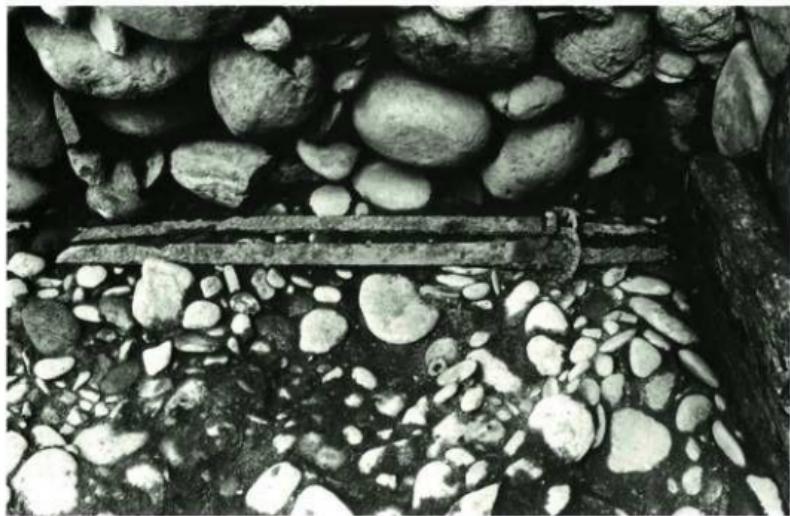


三ヶ尻林遺跡4号墳石室内遺物出土状態



三ヶ尻林遺跡4号墳直刀2

図版20



三ヶ尻林遺跡4号墳直刀3・4



三ヶ尻林遺跡4号墳人骨・銅鈴



三ヶ尻林遺跡4号墳土製小玉



三ヶ尻林遺跡4号墳土層断面

図版22



三ヶ尻林遺跡 4号墳土層断面



三ヶ尻林遺跡 4号墳土層断面



三ヶ尻林遺跡4号墳

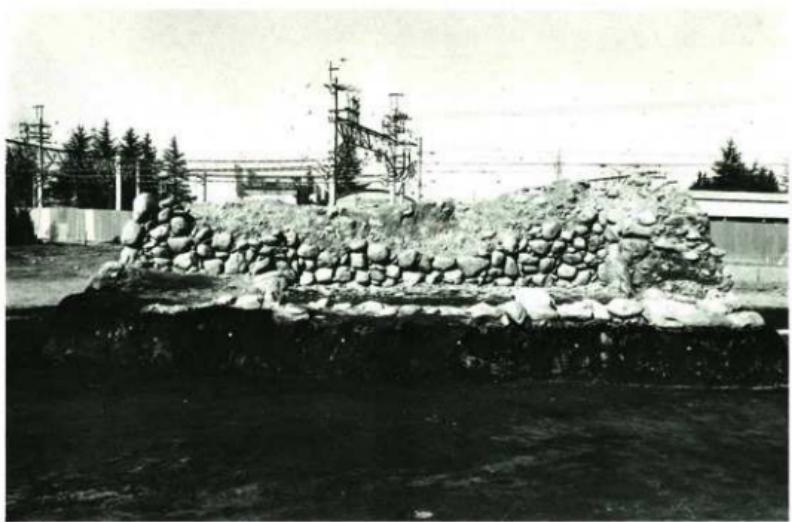


三ヶ尻林遺跡4号墳

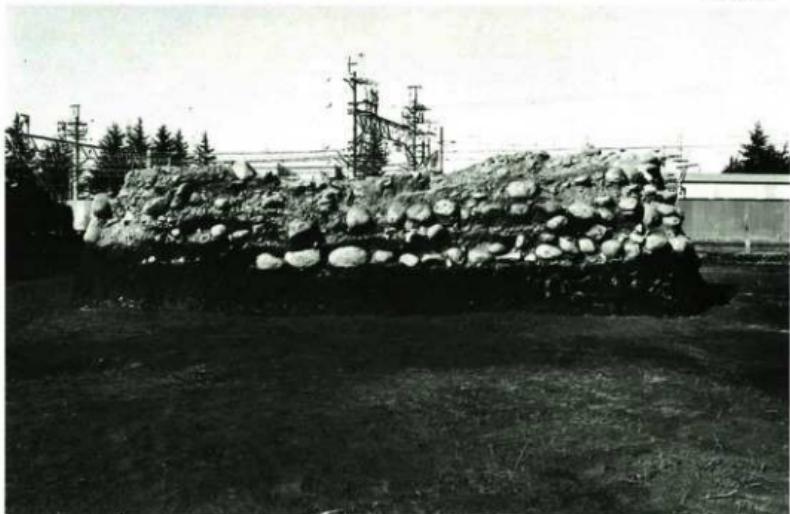
図版24



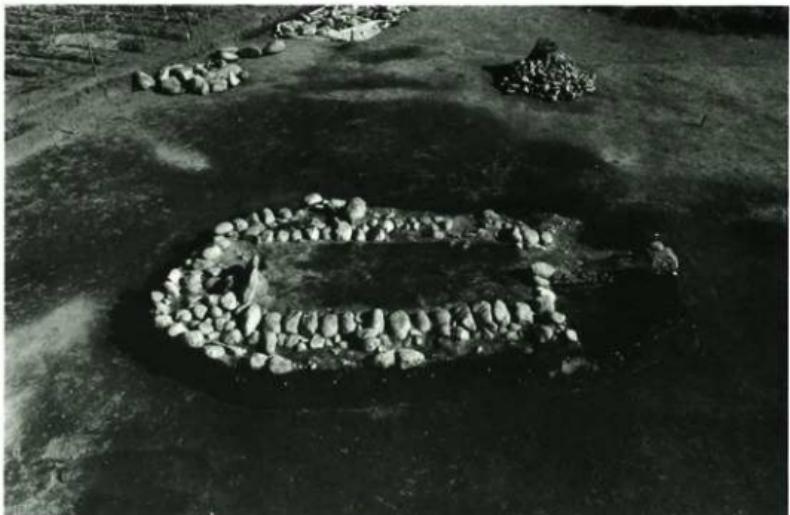
三ヶ尻林遺跡4号墳



三ヶ尻林遺跡4号墳



三ヶ尻林遺跡4号墳



三ヶ尻林遺跡4号墳礎床部

図版26



三ヶ尻林遺跡5号墳



三ヶ尻林遺跡5号墳石室



三ヶ尻林遺跡C区全景



三ヶ尻林遺跡7号墳

図版28



三ヶ尻林遺跡 7号墳



三ヶ尻林遺跡 1号箱式石棺



三ヶ尻林遺跡A区3号土壤



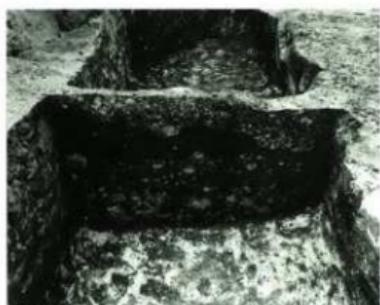
三ヶ尻林遺跡A区27号土壤



三ヶ尻林遺跡A区30~37・39号土壤



三ヶ尻林遺跡A区50号土壤



三ヶ尻林遺跡A区54号土壤



三ヶ尻林遺跡C区3~5号土壤

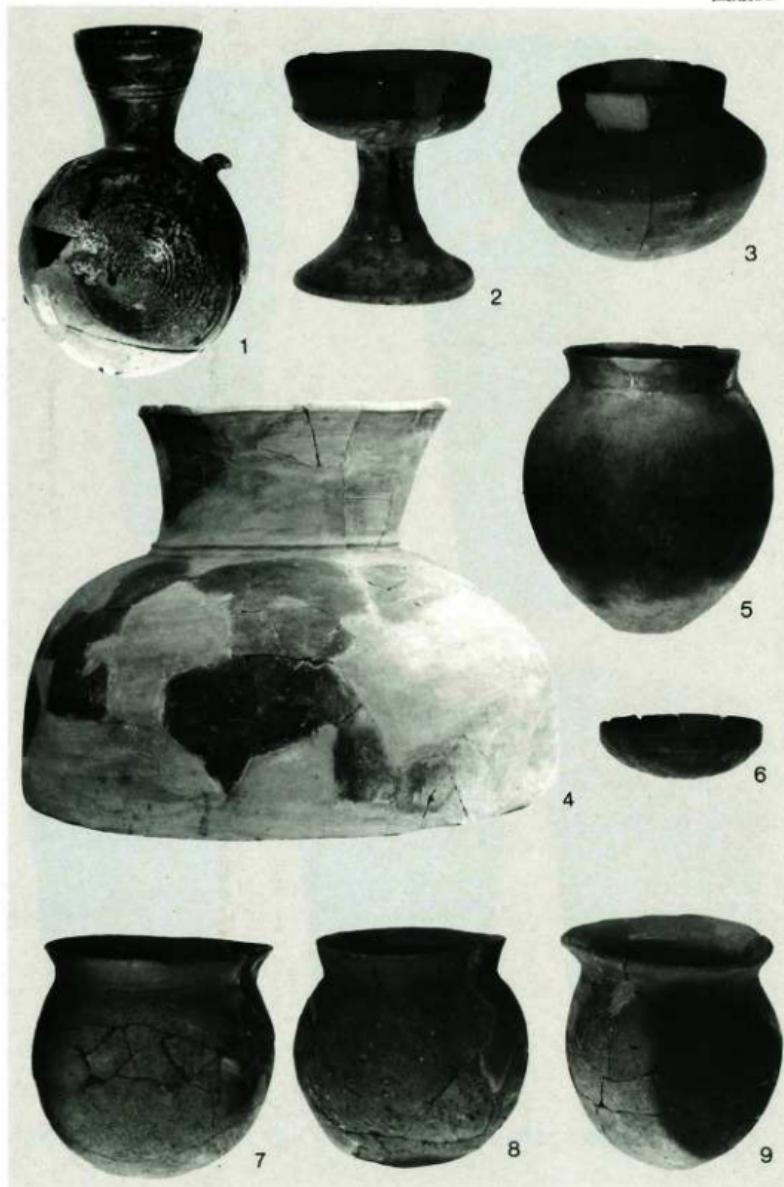
図版30



三ヶ尻林遺跡 D区 1号墳



三ヶ尻林遺跡14号墳



三ヶ尻林遺跡出土土器 1～4（4号墳）、5（3号墳）、6（1号堅穴）、7（1号墳）、8（7号墳）、9（1号住）



1(2)



2(1)



3(25)



4(27)



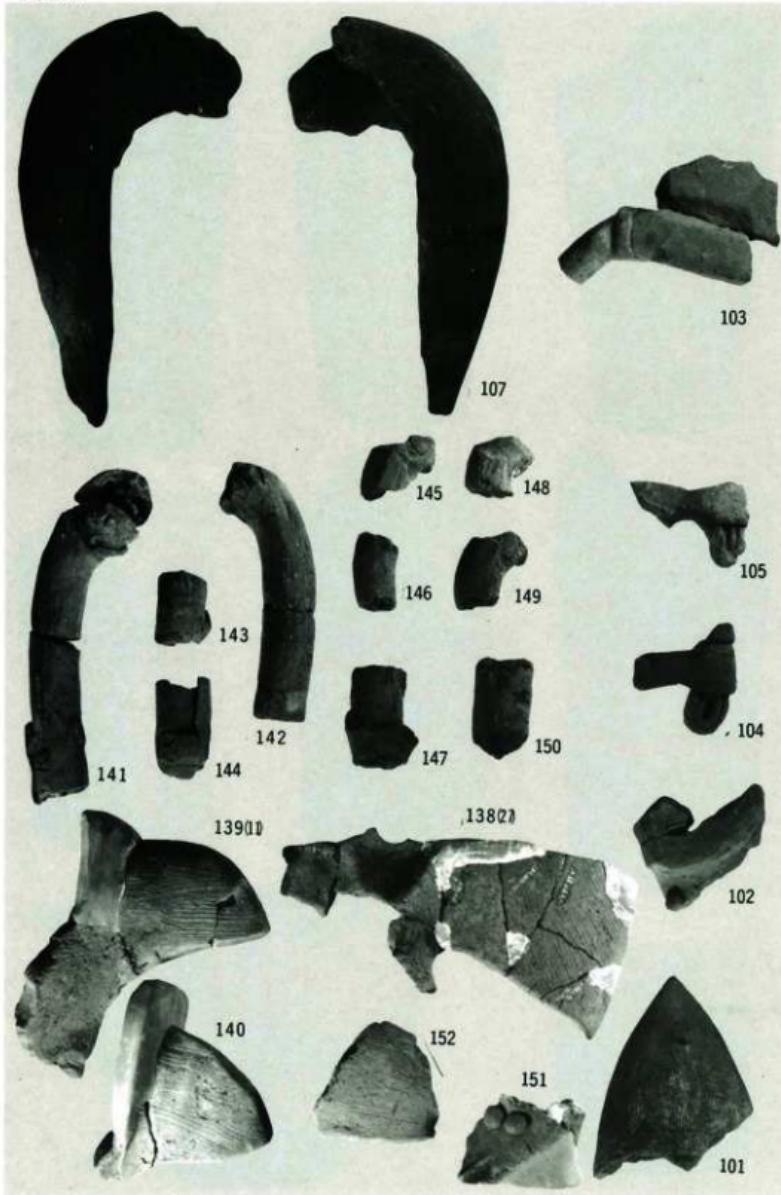
5(17)

三ヶ尻林遺跡4号墳出土円筒埴輪

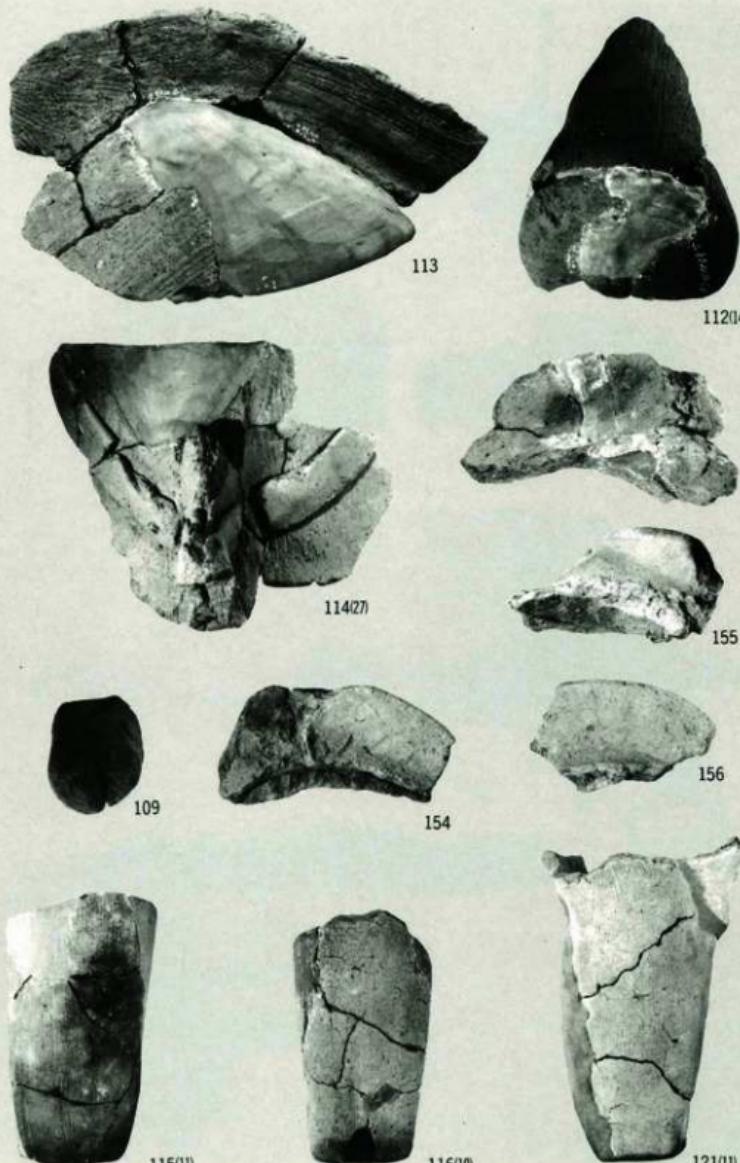


三ヶ尻林遺跡4号墳出土円筒埴輪

図版34

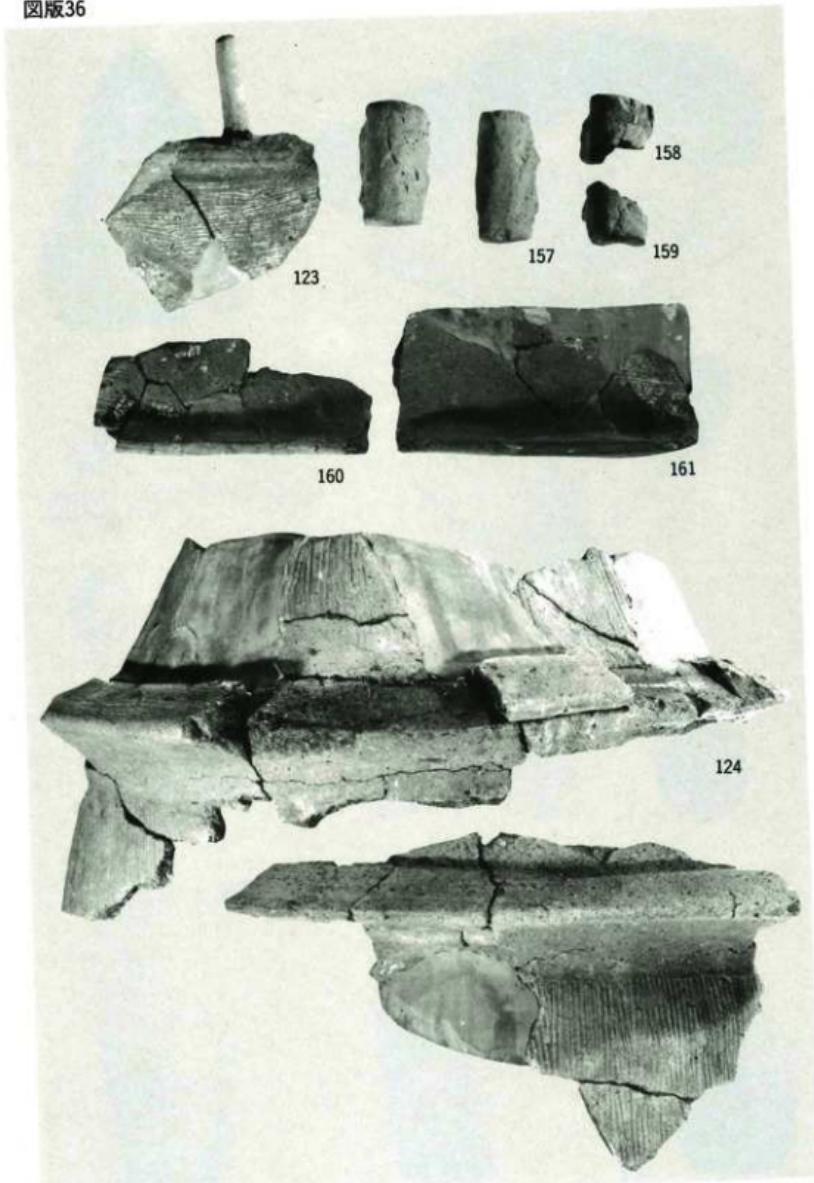


三ヶ瓦林遺跡4号墳出土人物埴輪

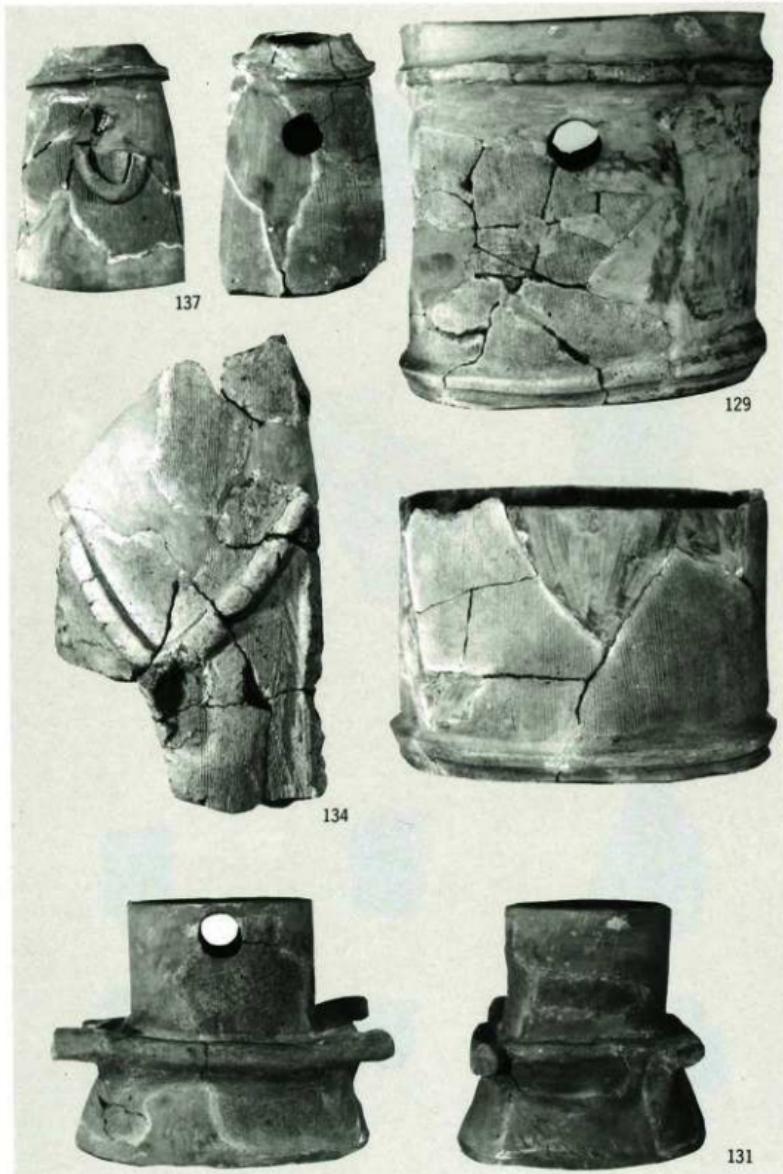


三ヶ尻林遺跡4号墳出土馬形埴輪

図版36

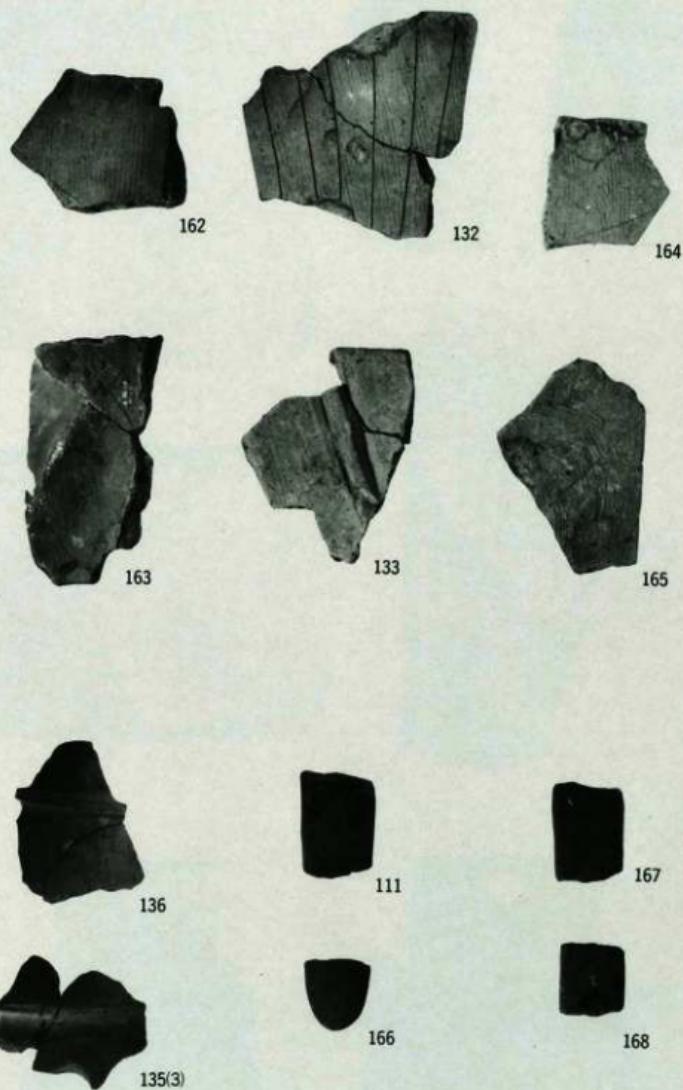


三ヶ尻林遺跡4号墳出土家形埴輪

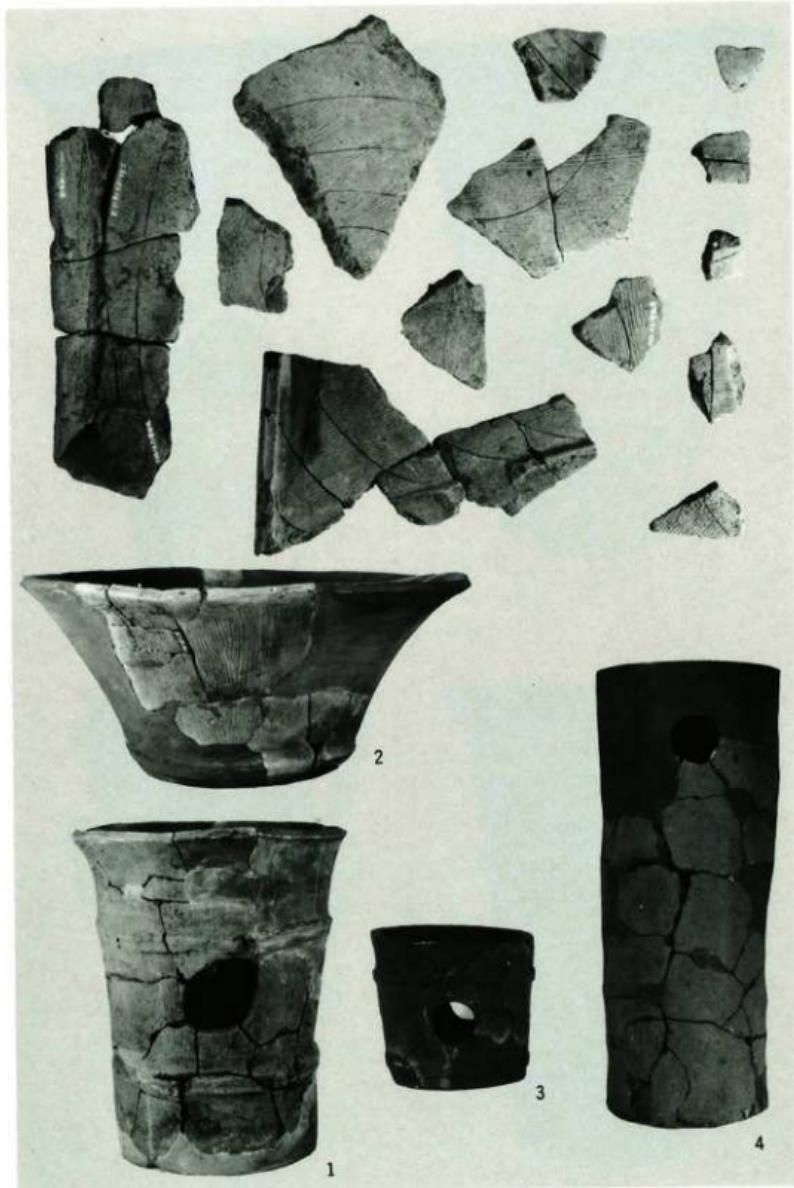


三ヶ尻林遺跡4号墳出土形象埴輪

図版38

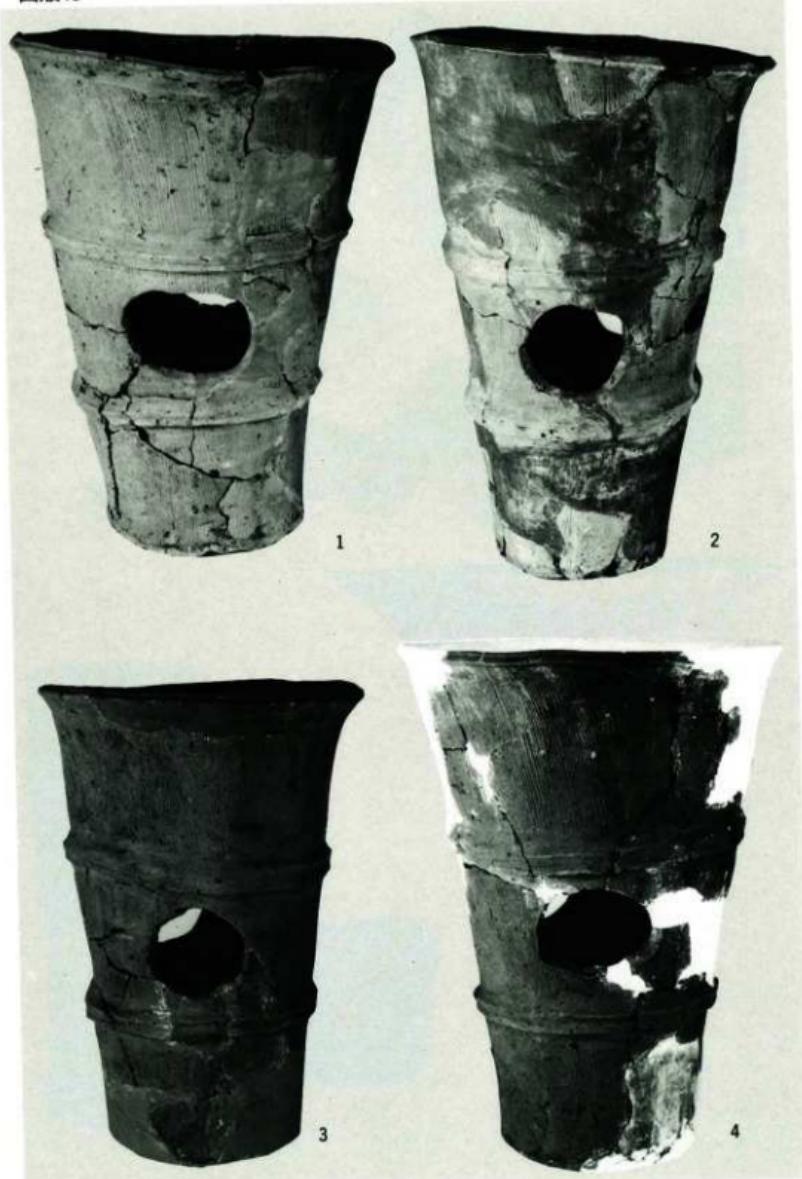


三ヶ尻林遺跡4号墳出土剣・太刀



三ヶ尻林遺跡8号上段・13号墳・グリッド出土埴輪

図版40



三ヶ尻林遺跡16号墳出土埴輪

図版41



1



2



12



3



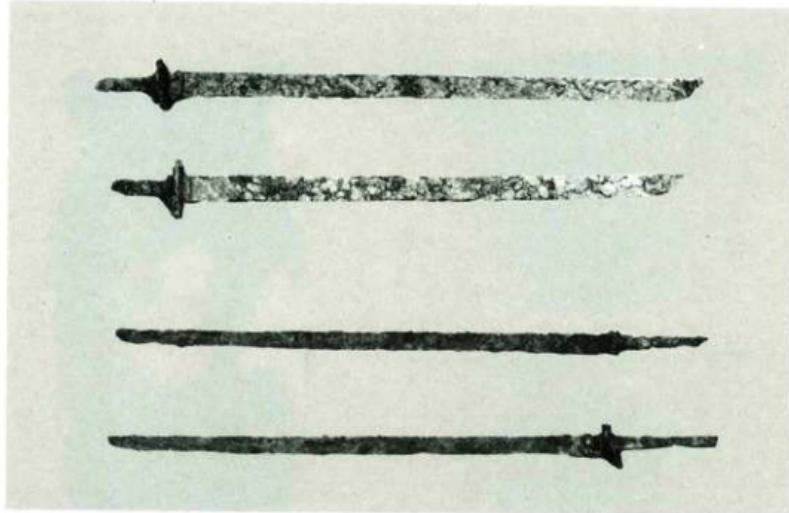
11



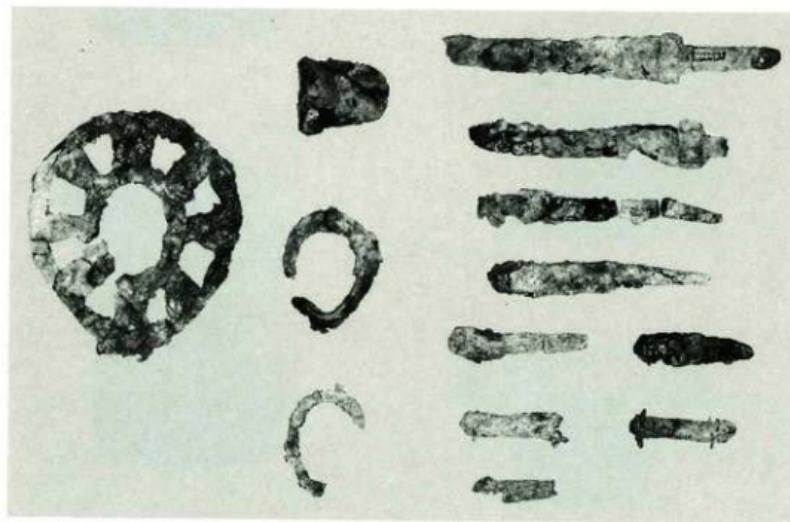
13

三ヶ尻林遺跡16号墳出土埴輪

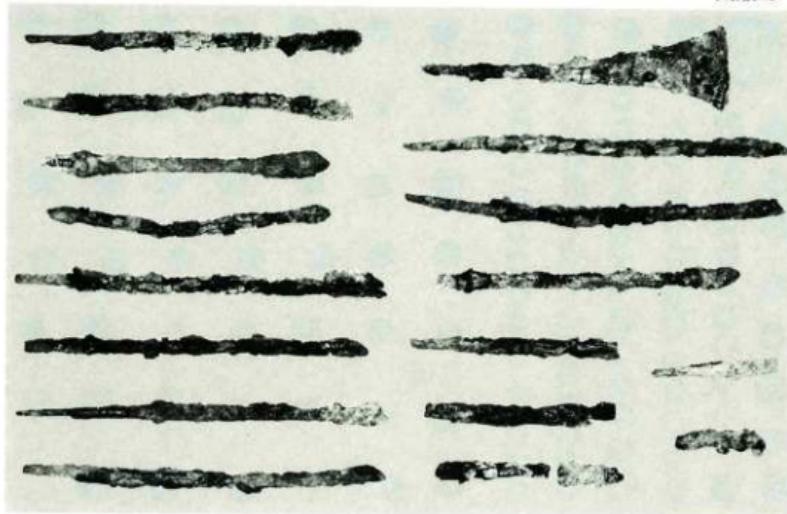
図版42



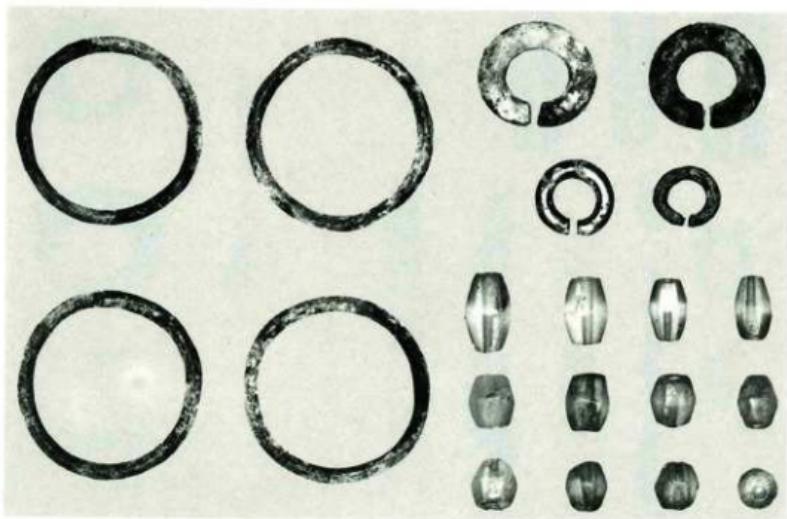
三ヶ尻林遺跡 4号墳出土直刀



三ヶ尻林遺跡 4号墳出土刀装具・刀子

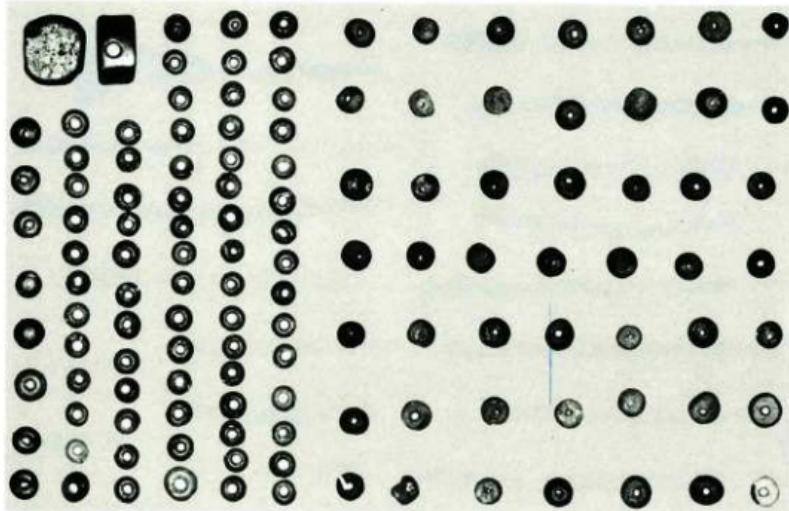


三ヶ 厄林遺跡 4号墳出土鐵器

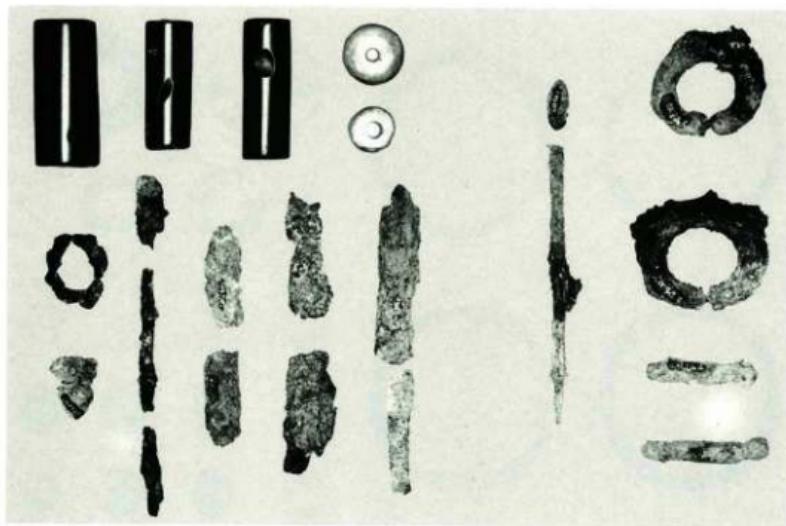


三ヶ 厄林遺跡 4号墳出土裝身具

図版44



三ヶ尻林遺跡 4号墳出土埋木玉・ガラス玉・土製小玉



三ヶ尻林遺跡 5号・7号墳出土遺物

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集

上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ

三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)

昭和58年3月25日 印刷

昭和58年3月31日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
印刷 アサヒ印刷株式会社